



大岡忠吉(高田村領主)系の忠厚(越前守忠相弟)家歴代の墓がある

東京都台東区谷中 瑞輪寺山門 (加藤幹雄会員撮影)

# 郷土らがさき

## 第158号

発行 令和5年9月1日  
 発行者 茅ヶ崎郷土会  
 会長 平野文明  
 編集責任 平野文明

谷中瑞輪寺の大岡家墓所	加藤幹雄……………2
妙行寺解説文から江戸初期の騒動を見る	山本俊雄……………8
南湖八雲神社の蛇飾りと小麦	名取龍彦……………11
茅ヶ崎の大岡諸家及び越前守忠相の経歴	石黒 進……………16
鎌倉古道 改めて検討	平松和弘……………20
風(自由投稿欄) 活弁に挑戦・ブログ	長谷川・前田……………24

夏は怪談。お盆は過ぎましたが毎日猛暑です。幽霊たちも、一年ぶりに帰ってきたご先祖たちも、この暑さには参っていました。

長寿を願わない人は、居ないことはないでしょうが、少ないです。娘が間違つて人魚の肉を食べたことから、あの世に行くことができずに、若い姿のまま八百歳まで生きました。何回も夫を迎え、子供もたくさん育てましたが、みんな自分より先に亡くなるので世の無常を嘆くこととせきりでした。そして八百比丘尼(やおびくに)という尼さんになりました。

夏、私が子供のころ、三〇度をこす日は少なかったです。近年、地球上の気温の上昇が、生あるものを苦しめ、山火事を呼び、湖を干し、氷山を溶かしています。さらに、人間界の争いは絶えず、核兵器を脅しに使う者もいます。

ある日、どこかの誰かが核ミサイル発射の号令を掛けました。その瞬間、ミサイルが発射台を離れる前に地球はスッと消えて無くなりました。ところがそれはこの世の終わりではなかったのです。すぐに地球の素

が生まれ、成長を始めました。そしてまた四十五億年が過ぎ、同じ現象が起きました。地球はこのサイクルを何回繰り返せば済むことやら。

(二〇二三年八月二〇日 茅ヶ崎郷土会々長 平野文明)

## 谷中瑞輪寺の大岡家墓所

加藤幹雄

はじめに

令和五年四月の大岡越前祭の際に、茅ヶ崎郷土会は「大岡越前守忠相公ゆかりの写真展」を茅ヶ崎市民文化会館で開催した。その展示の中に、東京谷中にある瑞輪寺(ずいりんじ)山門と山門前の方に「越前大岡家墓所」なる標石の写真があった。展示会場担当の方に瑞輪寺の大岡家被葬者を確認すると「墓石が不明で良く分からない」との事であった。写真展から二ヶ月後、偶然にも瑞輪寺の近くで親類の法事があり、出席した帰りに立ち寄り、少々調査したのでここに報告したい。谷中墓地へ出向いたのは六月の土曜日であったが、コロナも解禁され欧米人観光客が多数訪れていたのには驚かされた。

**瑞輪寺** 東京都台東区谷中四―二―五

瑞輪寺の概要をホームページから次に抜粋転載する。

慈雲山瑞輪寺と号し、日蓮宗。本尊安産飯匙祖師(あんざんしやもしそし)。開山は慈雲院日新上人。

開基徳川家康。日新上人は徳川家康が幼少の頃、学問教育の師範であった。家康は天下統一の後、天正十九年(一五九二)に学問教育に預かった謝儀をあらわし、日本橋馬喰町に身延山久遠寺の布教所として、寺の敷地約二百四方を与え、大久保治右衛門の外護(げご)領主などが、特定の宗教、寺院などを特別に保護す

ることにより瑞輪寺が創建された。

しかし、慶長元年(一五九六)に類焼、同六年(一六〇二)に神田に移転、また類焼し慶安二年(一六四九)現在の地、谷中に安藤右京之進の外護により再建築。安政三年(一八五六)台風のため大半が破壊、明治元年(一八六八)上野戦争により悉く焼失。その後、歴代上人により復興再建され、現在に至る。なお、塔頭は十五坊が存在したが現在は浄延院、体仙院、正行院、久成院、本妙院の五院。江戸開府四百年を記念して、平成十六年(二〇〇四)、当山第五十六世日總代が、本堂、山門、鐘楼堂、山道、諸堂を大修復、位牌堂を新築。

ホームページには大岡家と瑞輪寺の関係は書かれていない。また墓地には大名家(主に子女)の立派な石塔も多い。大久保家墓所に祭られている大久保主水(神田上水事業遂行者。墓は東京都指定旧跡)は有名である。祖師堂と七面堂は、一般参拝者から見ると瑞輪寺の境外にあるが、実際は両者の境内は繋がっている。祖師堂には、感応寺(現 天王寺)が日蓮宗から天台宗に改宗させられた際に移管された祖師像が、七面堂には、総本山久遠寺の守護神である七面大明神が祭られている。

大岡家と各墓所

『寛政重修諸家譜』には本姓・姓(かほね)・苗字・通称・諱(いみな)や生没年・功績・役職・石高・葬地などが記載されており、大名や旗本などの家系を調査するには大変便利である。

大岡家については『新訂 寛政重修諸家譜』第16 以下『寛政譜』という。文献①の三〇四頁に藤原氏の支流として、以下が記載されている。

大岡 今の呈譜に、鎌足二十代左大臣教實(尊卑分脈を按ずるに、教實は頼通(注1)の流にみえたり)の後裔、忠教三河国八名郡宇利郷(注2)に居住せしとき、大岡をもつて家号とす。其男傳藏善吉二男あり。長男を忠右衛門忠勝といひ、二男を三右衛門忠直といふ。忠直は今大岡宇兵衛直昌が祖なりといふ。ここに有る長男忠右衛門忠勝は茅ヶ崎の浄見寺に堤大岡家の初代として祭られている。

(注1) 藤原頼通(ふじわらのよりみち) 平安時代中期から後期にかけての公卿、歌人。藤原北家、摂政太政大臣藤原道長の長男。官位は従一位、摂政、関白、太政大臣、准三宮。父道長から若くして後一条天皇の摂政を譲られ、その後見を受ける。父の死後は朝政の第一人者として後朱雀天皇、後冷泉天皇の治世にて、関白を五十年の長きに亘つて務め、父道長と共に藤原氏の全盛時代を築いた。現代に残るその栄華の象徴が頼通が造営した平等院鳳凰堂である。【文献②】

(注2) 八名郡 愛知県東部の静岡県に接する地域で、三河地方の朝倉川以北の、概ね豊川・宇連川の左岸(一部例外あり)にあった郡。現在の豊橋市朝倉川北岸、新城市南東部および豊川市の一部が該当する。【文献③】

『寛政譜』三〇四頁〜三三三頁に記載されている大岡家は本・分家を合わせて全部で二二家ある。そこに書かれている初代当主および子孫の墓所は次の通りである。( )は筆者記入。

当主と墓所(葬地)

- 1 忠勝(ただかつ)家 神奈川県茅ヶ崎市浄見寺
- 2 忠世(ただよ)家 神奈川県茅ヶ崎市浄見寺
- 3 忠吉(ただよし)家 神奈川県茅ヶ崎市浄見寺 相良郡山田村
- 4 忠厚(ただあつ)家 東京都谷中瑞輪寺
- 5 忠久(ただひさ)家 神奈川県茅ヶ崎市浄見寺 東京都牛込久成寺(現常楽寺)
- 6 忠道(ただみち)家 東京都牛込久成寺(現常楽寺)
- 7 忠豊(ただとよ)家 東京都牛込久成寺(現常楽寺)
- 8 吉明(ただあき)家 東京都麻布湖雲寺(消滅)
- 9 忠房(ただふさ)家 東京都麻布湖雲寺(消滅) 埼玉県岩槻龍門寺
- 10 政保(まさやす)家 東京都谷中感応寺(現天王寺)
- 11 寛直(ひろなお)家 東京都谷中感応寺(現天王寺)
- 12 正則(まさのり)家 東京都浅草本願寺・長敬寺 京都市本禅寺養膳院
- 13 直政(なおまさ)家 東京都谷中感応寺(現天王寺)
- 14 直信(なおのぶ)家 東京都谷中感応寺圓曉院(現天王寺) 東京都四谷東長寺
- 15 直好(なおよし)家 東京都谷中感応寺圓曉院(現天王寺)

寺) 三重県桑名市壽量寺 山梨県甲府市法華寺

16 義勝(よしかつ)家 神奈川県中和田西光寺(「相模国高

座郡中和田村」とあるが現在地不詳) 東京都浅草西福寺

17 義昌(よしまさ)家 東京都高田清源寺

18 重英(しげふさ)家 東京都高田清源寺

19 吉忠(よしただ)家 記載なし

20 吉政(よしまさ)家 東京都青山妙圓寺

21 時吉(ときよし)家 東京都小日向福勝寺 東京都四谷

正応寺 東京都四谷法恩寺

以上の事から瑞輪寺に葬られているのは大岡忠厚家であることが分かる。

### 大岡忠厚家について

瑞輪寺を葬地とする大岡忠厚家を『寛政譜』三二二頁から抜粋要約する。

(一) 初代大岡忠厚(ただあつ) 大岡美濃守忠高の五男で大岡越

前守忠相の弟にあたる。忠厚は父忠高の遺跡大和式上郡(しきのかみぐん)に五百石を所領し、寛永元年(一六二四)御書院番に

列し、寛永五年(一六二八)九月二十八才で死す、法名日峯、谷中の瑞輪寺に葬る。のち代々葬地とする。

(二) 二代大岡忠寛(ただゆき) 大岡美濃守忠高の三男。忠厚が終に臨みて養子となる。寛永五年遺跡を継ぐ。御小姓組・西城

の御書院番になり寛延二年(一七四九)八月死す。年四十六。法名日隆。

(三) 三代大岡忠武(ただたけ) 寛延二年十一月遺跡を継ぐ。御小姓組に列し明和元年(一七六四)五月死す。年五十。法名

日栄。

(四) 四代大岡忠正(ただまさ) 小栗主計徳政の四男、忠武の

養子となり、忠武の娘を妻とする。天明元年(一七八二)七月遺跡を継ぐ。御小姓組に列し、寛政四年(一七九二)正月に死す。年三十七。法名日忍。

(五) 五代大岡忠祿(ただよし) 寛政四年(一七九二)三月遺跡を継ぐ。時に十七歳采地五百石。

五代大岡忠祿以降、幕末まで家系は続いていると思われるが『寛政譜』の記載は忠祿までである。また(一)忠寛(五)忠祿は『寛政譜』に葬地が書かれていないが、(二)忠厚に「代々葬地とする」とあることから瑞輪寺と判断して良いと思う。瑞輪寺には江戸時代末期まで、この五代とそれに続く子孫達や親族も葬られている可能性が高いと判断される。

### 『谷中過去帳』による瑞輪寺大岡家の被葬者

『谷中過去帳 谷中寺町人物博物館目録』【文献④】には、谷中にある寺院の被葬者(著名人や大名・旗本などが収録されている。谷中の多くの寺院がこの『谷中過去帳』を墓地案内に利用していると、谷中にある天王寺の案内僧から聞いた。大岡家は同書一四二〜一四五頁に掲載されており、それによると瑞輪寺墓地には、前記(一)大岡忠厚(五)忠祿まで五代のほか次の六名を併せ、合計一名の被葬者が記載されている。

(六) 大岡〇〇 大綱院殿忠誉窓月浄見居士

(七) 大岡忠相 大岡越前守、松運院殿前越州刺史興誉仁山崇

(八) 大岡忠宜(ただよし) 江戸町奉行大岡忠相の子。享保一九

年(二七三四) 従五位下紀伊守。延享三年(二七四六) 能登守、宝曆二年(二七五二) 遺領を継ぐ。大番頭。三年(二七五三) 越前守、宝曆十三年(二七六三) 下総国相馬、岡田、豊田三郡の地を三河国加茂・碧海両郡の内に移される。輒(な) 光院殿前越州刺史 触誓忠宜照天大居士。(筆者注 この文面は『寛政譜』三〇八頁から引用してある。)

(九) 大岡忠暁(忠恒) ただつね 俊徳院前越州至信日誠大居士。

(二〇) 大岡忠暁実母 妙法皓月院殿妙光日詠大信尼。

(二二) 大岡〇〇 真月院殿妙晴日光大信尼。(筆者注 人物を特定できない。)

「(六) 大岡〇〇」は『谷中過去帳』では不明としているが戒名から大岡忠勝と判断した。

また、(六) 大岡忠勝、(七) 大岡忠相、(八) 大岡忠宜、(九) 大岡忠暁(忠恒) の四名は茅ヶ崎浄見寺にも墓石があり、(八) 忠宜、(九) 忠暁(忠恒) は茅ヶ崎の忠世の家系に連なるものである。

二つある(九) 大岡忠暁(忠恒) の戒名

『谷中過去帳』に記載されている瑞輪寺の(九) 大岡忠暁(忠恒) の戒名と、浄見寺の墓石に彫られている戒名に違いがあり二種の戒名の存在が分かった。

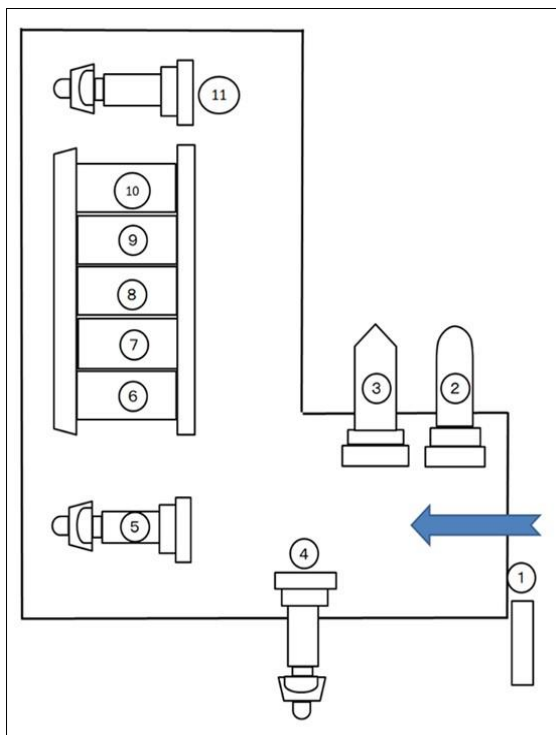
瑞輪寺 俊徳院前越州至信日誠大居士

浄見寺 俊徳院前能州太守仁誓寛流伝英大居士

この違いは供養した寺の宗派によるものであろうか。

瑞輪寺大岡家墓所と墓石

瑞輪寺、大岡家の墓所は本堂に向かって左側、鐘樓の横を通り、墓地を西に進むと東京都指定旧跡となつている大久保家の墓所があり、その斜め向かい側に上村家と宮川家に挟まれてある。茅ヶ崎の浄見寺と比較するとかなり小規模である。墓所の入口左には「越前大岡家墓所」の標石があり、墓所の中には墓石が全部で一〇基ある。唐破風付笠塔婆型二基、櫛型二基、駒型二基、壁型(筆者が命名) 五基。墓所図は下記に表す。なお、( ) は筆者の注記である。



瑞輪寺の大岡忠厚家墓石配置図

墓石番号①は標石で  
 (正面) 「越前大岡家墓所」  
 墓石番号②は





墓石番号③  
大岡忠勝・忠相他3人の戒名が  
ある供養塔  
筆者撮影  
2023.06.11

・真月院殿妙晴日光大信尼。文化十五年(一八二八)戊寅  
正月朔日 (右側面) 大岡氏女墓(人物を特定できず)  
墓石番号③ (一石に五名連刻されており、供養墓と思われる。  
造立年・建立者銘はない。正面の銘は向かって右より次のお  
り。裏面・側面に刻銘はない。)

- ・慈慶院明誉光月壽昭大禅尼(人物を特定できず) 明和六年(一七六九)己丑七月二十八日
- ・松運院殿前越前刺吏興誉仁崇義大居士(大岡忠相) 宝暦元年(一七五二)辛未十二月十六日
- ・大綱院殿忠誉窓月浄見居士(大岡忠勝) 文禄三年(一五九四)甲午六月十二日
- ・輦光院殿前越州刺吏触誉忠宜照天大居士(大岡忠宜) 明和三年(一七六六)丙戌八月二十五日
- ・延壽院殿松殿貞栄大姉(大岡忠宜の前室) 明和六年(一七六九)己丑八月十二日

(大岡忠宜の前室)は『茅ヶ崎市史研究』創刊号に収められて  
いる山口金次著「茅ヶ崎市内に現存する大名・旗本墓石一  
覧」【文献⑤】の堤 浄見寺大岡家墓碑文(同書六八頁)に  
「14 延壽院殿松誉(ママ)貞栄大姉(忠宜ノ前室) / 明和六  
己丑 八月十六日」とある。

墓石番号④は  
・妙法皓月院殿妙光日詠大信尼 寛政元年(一七八九)己酉五月  
十二冥卒 (右側面) 大岡越州忠暁實母墓

墓石番号⑤は  
・俊徳院殿前越州至信日誠大居士。天明六年(一七八六)丙午三  
月十六冥卒 (右側面) 藤原姓大岡忠暁墓 行年三十六歳  
(笠の家紋は蔓柏であり、大岡家とは異なるため笠は塔身とは別  
物かも知れない)

墓石番号⑥⑩は  
(壁型)の珍しい墓石。いずれも江戸時代前期の古いものであり、  
大岡家親族の墓石と考えられるが特定はできなかった。各墓石に  
はそれぞれ複数名の戒名が彫られている。詳細は省略する。なお、  
「壁型」は筆者が便宜的に付けた呼び方である。

- 墓石番号⑪は
  - ・(正面右側) 樹陰休亭日方 享保十一(一七二六)丙午十二  
月廿三日
  - (正面左側) 華下安基日正 元文五(一七四〇)庚申八月十二  
日
  - (正面下) 性智妙直靈 享保九(一七二四)甲辰年式月十六日
  - (右側面) 勝田兵左衛門 藤原助頭
- (三名刻銘墓石で、勝田兵左衛門が供養のために造立したもの)



と思われるが勝田氏と大岡家との関係は不明である。) 本来、瑞輪寺にあるべき初代大岡忠厚、二代大岡忠寛、三代大岡忠武、四代大岡忠正、五代大岡忠祿の墓石はなかった。度重なる天災や戦争によって失われたものと考えられる。

その他

瑞輪寺調査の帰り、西日暮里駅近くにある天王寺にも立ち寄った。天王寺は大岡家一族の多くの墓所になっていたかつての谷中感応寺を吸収したこともあり、多くの墓石が残っていることを期待し、墓地内を捜したが見つけることは出来なかった。そこで天王寺に確認したところ、案内の僧が『谷中過去帳』を取り出し調べて呉れたが大岡家の墓石は一基もないとの結論であ



つた。震災・戦災で痛められた大岡家の墓石は全て廃却処分されたのであろうとの事であった。なお、案内の僧によると天王寺の墓地に、現在、NHK朝の連続ドラマの主人公、牧野富太郎博士の墓石もあり紹介された。

【引用文献】

文献① 『新訂寛政重修諸家譜』(続群書類従完成会編 昭和四十六年出版) 諸大名以下幕臣目見え以上の諸氏の系図、略歴を記した書。江戸幕府が計画、一七九九(寛政11)〜一八一二(文化09)年成る。一五

三五卷。―広辞苑

文献② ③ ウキヘディア

文献④ 『谷中過去帳 谷中寺町人物博物館目録』(末松芳一編・刊

平成六年十一月発行)

文献⑤ 山口金次著『茅ヶ崎市内に現存する大名・旗本墓石一覽』

(『茅ヶ崎市史研究』創刊号所収 昭和五十一年茅ヶ崎市刊)

(令和五年八月八日 記)

## 妙行寺解説文から江戸初期の騒動を見る

山本俊雄

郷土会の史跡巡り「大山道を歩く②」のための資料を読んできましたところ、『ぶらり散歩 郷土再発見』（平成七年市教育委員会刊）の、妙行寺本尊の日蓮坐像について次のように記してありました。

この像について『新編相模国風土記稿』に、紀州侯徳川頼宣の娘、松平相模守光仲の後室（後妻）芳心院妙英日春が彫刻し、池上本門寺十九世日豊が開眼したとあります。しかし、『茅ヶ崎市史』では、開眼したのは厨子の扉内の墨書銘にある日顛（にちがい）ではないかとしています。

ここで、疑問がわいてきました。先ず、松平相模守光仲とは誰なのか？調べてみますと、因州（因幡）鳥取藩初代の池田光仲のことでした。次に、光仲が紀州侯頼宣の娘（家康の孫）を後妻にした、とはどういうことか？辞書を引くと、後室には後妻の意味はなく、①「後ろの部屋」か、②「身分の高い人の未亡人」とあるのです。

念のため、光仲が早死にしたのか、頼宣の娘（芳心院妙英日春）がよほど長生きしたのか調べてみますと、光仲は徳川家康の外曾孫（がいそうそんしそとひ孫）で、寛永七年（一六三〇）六月十八日生まれ、元禄六年（一六九三）七月七日死去。鳥取池田家を継ぎ、正室は徳川頼宣の長女茶々姫（芳心院妙英日春）で、正保二年（一六四五）幕府の斡旋で結婚した、とありました。つまり、池田

光仲の後室とは茶々姫のことです。そして、茶々姫の生まれは寛永八年（一六三二）九月二十二日で、宝永五年（一七〇八）十一月二十八日に死去しています。茶々姫は光仲死去後、十六年も未亡人として長生きしています。後室の②の意味にピタリと符合します。また、『新編相模国風土記稿』には「後妻」とは書かれていません。また、「開眼したのは厨子の扉内の墨書銘にある日顛（にちがい）」中の「日顛」の「顛」を辞書で引くと、読みは「がい」ではなく、「ぎ」と出てきます。妙行寺に伺ったときに住職にも確認したところ「開眼したのは日顛（にちぎ）」とのことでした。

池田光仲を調べていますと面白い事実に出会いました。

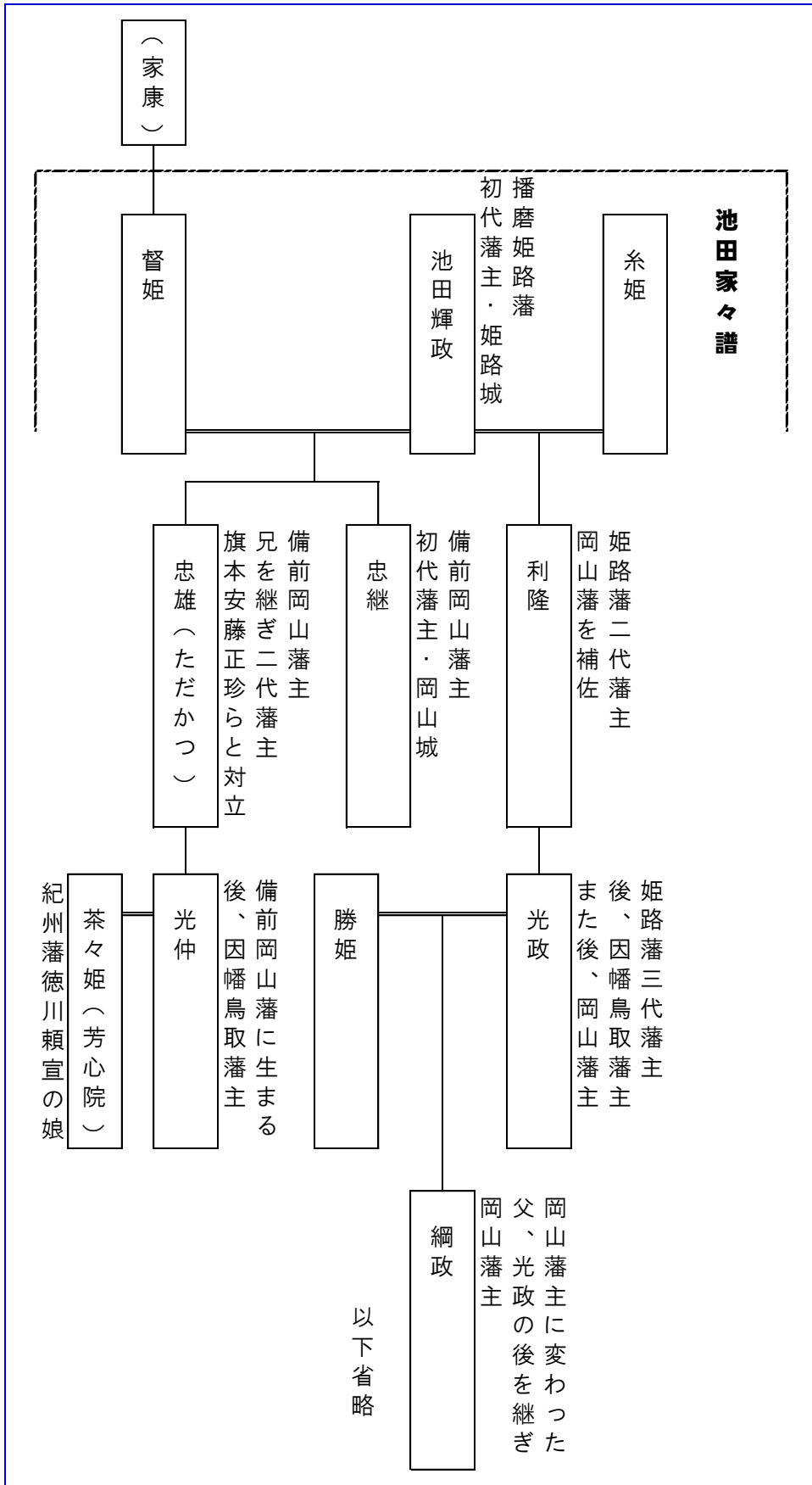
光仲は、父（忠雄）が家康の娘（曾姫）の子ですから、家康の外曾孫になります。岡山藩池田家（三十一万五千石）は、督姫の長男忠継（一五九九〜一六二五）が家康の寵愛を受け、五歳で岡山藩初代藩主となります。しかし、忠継が若くして亡くなり、弟の忠雄が二代藩主となりますが、この頃岡山藩内で起きた殺傷事件から、藩主であり大名の忠雄と直参旗本安藤正珍（まさよし）の争いに発展、忠雄は三十一歳の若さで憤死したといわれています。

忠雄の嫡子光仲は岡山藩を継ぐべきでしたが、三歳で幼少のため、鳥取藩（三十二万五千石）主だった従兄弟（いとこ）の光政



と交換国替えとなり、光政は岡山藩主に、光仲は鳥取藩主になりました。

この忠雄憤死事件の結果に起きたのが日本三大仇討事件の一つ、渡辺数馬、荒木又右エ門による伊賀上野鍵屋の辻の事件で



す。この事件は、会員の小山章治さんから借りた『週刊名城をゆく 一八 岡山城 仁政を敷いた名君 池田光政』(小学館二〇〇四年刊)に菅井靖雄著「城主池田忠雄の死を招いた藩士惨殺事件」として以下の様に記されています。

寛永七年(一六三〇)七月二十一日のこと、岡山城大手門前広場では藩主忠雄の嫡子誕生を祝い盆踊りが行なわれていた。領民たちの踊りを、忠雄も櫓から見物している。その夜、ひとつの事件が起こった。藩士河合又五郎ら四人が、同藩士渡辺源太夫を訪ねて惨殺し、出奔したのである。報告を受けた忠雄は、「又五郎一味を召し取り、切腹させよ」と命じた。すぐさま又五郎の父半左衛門を捕えて幽閉する。そして探索すると、又五郎は江戸の旗本安藤治左(右?) 衛門方に匿われていると判明した。

人を立てて交渉すると、安藤は、「父の半左衛門と交換なら心じょう」という。そこで半左衛門を江戸へ護送、安藤へ引き渡す。すると安藤、又五郎は返さず、二人とも匿ってしまった。旗本の違約に憤った忠雄は、他の大名たちの応援を得て將軍家光に訴えた。旗本たちも、直参としての意地から、大奥に運動して幕閣に働きかける。

御三家が調停しようとするが、決着がつかない。外様大名対旗本の、大衝突事件に発展しそうな気配になった。

忠雄は、心痛で臥せってしまう。そして臨終の場に、弟の播磨山崎藩主輝澄、赤穂藩主政綱、渡辺源太夫の兄数馬らをよび、「余が死んでも、読経はいらぬ。又五郎の首を墓前に供えよ。それが余への供養だ」と遺言し、寛永九年(一六三二)四月三日、江戸藩邸で憤死してしまった。まだ三十一歳の若さであった。

輝澄、政綱は兄の遺志を継いで、幕府に強く訴えかけたので、家光

も決断を下さざるをえない。半左衛門は忠雄の岳父・阿波徳島藩蜂須賀忠政へお預け、河合又五郎は江戸払い、匿った旗本たちは蟄居。ただし、けんか両成敗のため、忠雄の後継者光仲も因幡鳥取に国替えとされた。

蜂須賀忠政は、半左衛門を大坂から阿波へ送る途中、船内で刺殺してしまう。幕府には頓死と届け出て、池田家の面目を立てた。

しかし、肝心の又五郎がまだ生きています。池田家としては、彼の首を見なくては十分な面目が立ったとはいえない。

渡辺数馬は、又五郎を上意討ちするために探索の旅に出た。数馬の姉婿荒木又右衛門も大和郡山藩から暇をとって浪人となり、探索に力を貸してくれる。二人は、又五郎の叔父甚左衛門が大和奈良に居住していることを知った。ここを探ると、やはり匿われていた。そして、近々江戸へ向かう予定だという。

寛永十一年(一六三四)十一月七日未明、数馬らは伊賀上野鍵屋の辻で、又五郎一行を待ち伏せした。一行は二十人ほど。甚左衛門のほかにも槍の名人として名高い桜井半兵衛も護衛として加わっている。対する数馬方は、荒木又右衛門と若党の武左衛門、孫右衛門の四人のみ。

一行の前に飛び出して、又右衛門が先頭の馬上の甚左衛門を斬り落とした。数馬は、又五郎に斬りかかる。又右衛門ら三名は半兵衛ら他のものを引き受け、数馬は、又五郎と一騎打ち。激闘三時間、双方疲労困憊していたが、荒木の激励で数馬は、ついに又五郎の首をあげた。しかし、数馬も受けた傷が十三か所、荒木は一か所。武左衛門は深傷三か所、孫右衛門は浅傷十一か所で、武左衛門は夜に死亡する。

三人は伊勢藤堂藩に預けられたが、寛永十五年(一六三八)に無罪放免となった。主家鳥取池田藩に帰参後、岡山にある憤死した主君忠

雄の墓に、三人は仇討ち成就をやつと報告したのである。ただし、以後旗本による鳥取藩への嫌がらせが増えた。お家を守るためには、幕府の機嫌を取らねばならない。藩主光仲、宗泰、重寛、治道の正室を紀伊徳川家から迎え、また、將軍家斉の孫慶栄、水戸藩主徳川斉昭の五男慶徳も池田家へ養子として入れることになってしまった。

幕府開白から三十年余、三代將軍家光の頃ともなれば、加藤、福島等有力大名は次々と取り潰しになり、徳川家と共に直参旗本の力が強くなっていたことがわかります。家康の外孫である大名池田家でさえ、旗本からないがしろにされたり、嫌がらせを受けたりしていたのでは、他の外様大名は生き残るためには大変だったと思われま

茅ヶ崎の海 よもやま話7

## 南湖 八雲神社の蛇飾りと小麦

名取龍彦

### 1 浜降祭と蛇飾り

暁の祭典「浜降祭」。海に向かって御座所に鎮座した寒川神社のお神輿とその両側に並ぶたくさんのお神輿が朝日を浴びている姿は美しいです。今年の七月十七日、茅ヶ崎西浜海岸で四年ぶりに浜降祭が開催されました。海岸には三四の神社から子ども神輿も含めて三八基のお神輿が揃いました。南湖中町の八雲神社のお神輿もそのひとつです。「蛇飾り」は八雲神社のお神輿の渡御に関わりがあります。「蛇飾り」に関する記述を『南湖郷土誌』から引用します。【注1】

「浜降祭の折、南湖の特定の場所に青竹の鳥居（これを門という）を建てた。神輿は必ずこの門をくぐって祭場の禊場に集合したものであり、退場のときもこれをくぐって退出した。

南湖では茶屋町を除いた各神社が、その青竹の門を神社の入口に立て、その上段の横竹に藁で作った蛇（竜ともいう）を這わせる。この上段の横竹は、男竹を竜の頭の方へ、女竹を竜の尾の方へ向けて交差させて作る。

竜の材料には、昔はこの頃がちょうど収穫期だったので新鮮な麦わらを使ったが、最近では中町以外では稲藁を使っている。



八雲神社の御神輿 2023. 7. 17 撮影

龍の胴回りは四〇センチ内外、長さは九〜一〇センチの大ききで、四人掛りで作る。眼は茄子、舌は葉らんを赤く染めたりして、頭の部分はまちまちである。神社の鳥居の他にも神輿渡御の道路へ二、三ヶ所これと同じものを設置したが、現在中町以外で作るのはそれぞれの神社のみとなった。

神輿がこの門の下をくぐる時に、海の神様八竜王のご神霊が乗り移り、浜でご神体を禊するときに、荒波から守るとされている。龍の頭は海の方へ向けて飾るものとされている。

祭りが終わると、この龍は神社の倉庫や神社の役員のお宅へ納めておき、正月十四日のサイトに焼く。」

引用文中に「中町以外で」の言葉が二回出てきます。つまり中町（八雲神社）が他と違って特別であるということです。他の神社との違いは蛇飾りの材料になる麦わらです。元々蛇飾りは麦わらで作られていました。

八竜王は海、川や湖にすみ、雨と水をつかさどり、漁村では海上の守護神として信仰されてきた神様です。『茅ヶ崎の海よもやま話』の初回で書きました。

## 2 小麦栽培

表1は、『茅ヶ崎市史』4にある明治四十二年と大正十四年の農作物作付面積の表から、主な作物を抽出して作り直しました。【注2】小麦の作付面積の増加が顕著です。

『茅ヶ崎市史』の解説を引用します。「穀類では水稻・大麦の作付面積は変化せず、小麦が急激な上昇を示し、粟は統計から姿を消し大豆も大きく減少する。小麦は第一次世界大戦以降、小麦粉として商品価値を高め、大正末期から昭和初期にかけて全国的に作付面積を増大するが、当地域の増加は最も早い部類に入る。【注3】

かつて小麦は茅ヶ崎一帯で作られていて、麦わらも豊富にあつたのです。また、小麦の収穫期は浜降祭と重なり、蛇飾りの材料として適していました。麦わらは、稲わらに比べて固くてしつかりとしていますので、大きな蛇飾りにはうってつけです。固いので「麦わら帽子」の材料にもなりました。逆に稲わらは柔らかく加工しやすいので、草履や正月飾り、しめ縄などの細工に適していました。

現在は小麦畑を身近で見ることがありません。令和二年には、茅ヶ崎で小麦を栽培している農家が二軒ありますが、作付面積と収穫量は公表し

表1 農作物の作付面積の比較

作物名	明治42年 作付面積	大正14年 作付面積
水稻	519町	514町
大麦	462	492
小麦	265	993
大豆	62	38
甘藷	600	635





南湖麦打唄 2019. 9. 14 撮影

ていません。【注4】  
小麦栽培が盛んだった名残が「南湖麦打唄」です。脱穀の道具「くるり」を使った麦打の様子は、「南湖麦打唄保存会」が市重要文化財(昭和五十四年三月指定)として継承しています。  
貴重になった麦わらを八雲神社へ提供していたのが、藤沢の小麦農家です。しかし、コロナ禍が続く中で藤沢の小麦農家が小麦栽培を止めてしまいました。

### 3 茅ヶ崎里山公園の小麦栽培

神奈川県立茅ヶ崎里山公園内の畑では、茅ヶ崎里山公園倶楽部員の手により、以前から小麦栽培が続いています。農林六一号という品種です。公園内で米や小麦、様々な野菜作りをしているのは、里山の文化を守り、里山の環境を守るためです。里山の美しさは人手がきちんと入った、手間のかかった自然の美しさです。ここで収穫した小麦は、茅ヶ崎里山公園倶楽部のイベントで、そうめん、バームクーヘン、ピザなどの材料となる小麦粉に加工しています。里山公園の小麦栽培は農家と違って利潤を追求する農



茅ヶ崎里山公園 収穫前の小麦畑 2020. 6. 17 撮影

り作業を行ないました。

4 蛇飾り作り 里山公園の麦わらを使って蛇飾りを作ったのは、浜降祭一週間前の七月九日です。八雲神社の氏子のみなさんが境内に集まり、四年ぶりの共同作業が行われました。頭と胴体を別に作って、後から繋ぎます。蛇(竜)の目はナス、耳はビワの葉

作業ではないため、小麦栽培が継続できています。筆者は茅ヶ崎里山公園倶楽部員です。今年、八雲神社への麦わらの供給が止まったことを知り、茅ヶ崎里山公園管理事務所と茅ヶ崎里山公園倶楽部のご理解とご協力により麦わらを八雲神社へ提供することになりました。

今年、里山公園内の畑で六月十五日に小麦の刈り取

です。出来上がった三体の蛇飾りは青竹に結わえて、三か所の門に付けました。八雲神社の鳥居、神社参道から南湖通りへの交差点、中町のくまじ前の辻です。  
郷土会のホームページに「南湖のナノカビ」2919・7・7、ナノカビは漢字を当てると「七日日」として、四年前の蛇飾りの関連記事が平野会長と尾高会員のレポートで載っています。【注5】



蛇飾りの頭 2023. 7. 9 撮影



蛇飾りの胴体 同日撮影



八雲神社鳥居への取り付け 2019. 7. 7 撮影

『南湖郷土誌』には、「なのか日」として「各町内で浜降祭の支度をこの日から始める。お神輿庫の扉を開け拝めるようにする。この日から神社の参道の両側には毎晩お灯明を灯した。町内によって多少の差はあるが、交代制の町頭(ちようがしら)が、その年の神社の一切に責任をもって当る。この日から町頭と自治会の役員たちは町内の注連縄張り、境内の清掃、神輿磨き、今年取れた麦藁または藁で蛇を作り大鳥居の上部に飾りつけたりの仕事に追われる。十四日の宵宮には、この仕事をねぎらう意味で団子の馳走





中に蛇飾りが入っています 2020. 1. 12 撮影



お団子を焼いています 同日撮影

を出す。小麦粉の団子で、丸めないで手で千切つて餡をからめて食べるので、「へらへら団子」または「とつちや投げ団子」というと解説があります。【注6】

### 5 おわりに

浜降祭で役目を終えた蛇飾りは、来年一月のサイト(サイト払い、団子焼き、ドンド焼き)で、古いお札、門松、しめ飾りなどと一緒に燃やされます。この火でお団子を焼いて食べます。お団子を食べると風邪などをひかないと言われています。三年前のサイトの写真です。

浜降祭は神奈川県無形民俗文化財です。八雲神社の蛇飾り作

りも永く受け継がれると思います。里山公園倶楽部の活動は里山の環境や文化を守ります。里山公園で小麦栽培が続く限り、両者の文化が繋がり、伝統文化、伝統行事が継承されることを願っています。

「南湖麦打唄保存会」へも脱穀前の麦の穂がついた小麦を一束、茅ヶ崎里山公園管理事務所と茅ヶ崎里山公園倶楽部から提供がありました。貴重な実物の小麦の束が、ここでも伝統文化の継承に役立つことを願っています。

筆者が、四年前に八雲神社で撮影し編集した蛇飾り作りの動画を紹介します。茅ヶ崎市の動画ライブラリーです。(二次元コード)



### 【注記】

注1 『南湖郷土誌』一三八・一三九頁

茅ヶ崎市文化資料館 一九九五年

注2 『茅ヶ崎市史』4通史編 第一五表四

九二頁 第二表五八九頁 茅ヶ崎市 一九

八一年

注3 『茅ヶ崎市史』4通史編 五八八・五

八九頁 茅ヶ崎市 一九八一年

注4 『統計年報』

茅ヶ崎市 二〇二三年三月

注5 郷土会ホームページ

「茅ヶ崎いろいろ」↓「茅ヶ崎風景で

注6 『南湖郷土誌』

二二六頁 茅ヶ崎市文化資料館 一九九五年

## 大岡越前守忠相ノート(その二)

## 茅ヶ崎の大岡諸家及び越前守忠相の経歴

## 石黒 進

大岡越前守忠相の「越前守」は、古代律令制で定められた六〇余国の一つ、越前国の国司を意味する「越前守」ではなくて、三河譜代の徳川家臣で、相模国高座郡に知行(領地)を与えられた江戸幕府の旗本大岡家の第五代(筆者注 三代とも数える)にあたる忠相に、大殿様の徳川將軍家を通して朝廷から与えられた「従五位下」と「越前守」という形式的官位・官職名である。その「越前守」をいただいた高級官僚の大岡越前守忠相の物語を始めよう。

茅ヶ崎市及び近辺の村に関係のある大岡家は堤村の浄見寺を菩提寺とする一族である。

徳川家康が小田原(後)北条家の領地を受け継ぎ江戸に入府するのは旧暦天正十八年のこと(一五九〇年 日付は旧暦八月一日)。

この後、秀吉が没して(一五九八年、さらに大坂城が滅びるまで(一六一五年)結局二十五年もかかった。この間に大岡家からは二人の戦死者を出している。

家康の江戸入府の日は八月の一日朔旦、この日を八朔といっで、江戸時代を通じて、大名や幕臣が総登城する祝日の特別な日であった(実際の「入府の日は少しずれているらしいが)。

家康に従って大岡家も関東の地にやって来た。二代目、大岡忠政は、家康が江戸入府後の所領宛行(しよりようあてがい)により茅

ヶ崎市域、高座郡堤村三八〇石の領地を与えられたのだ。領地宛行は天正十九年(一五九二)。続いて(下)大曲村(現寒川町域)二二〇石を加えられる。

忠政の長子忠俊(三代目)は、一六〇〇年二八歳、伏見城の戦いで早世した。次男の忠行が堤村の領主を継ぐ。忠政の弟の忠世は分家して大曲村の領主となる。忠世からその子忠真(四代目)に続く。そして忠世の弟の忠吉の家系に生まれた忠相は、忠真の養子に入り家を継ぐことになる。

初代忠勝は三河に葬られていたが、堤村に創建した浄見寺に改葬された。浄見寺が大岡一族の統合の要となる。

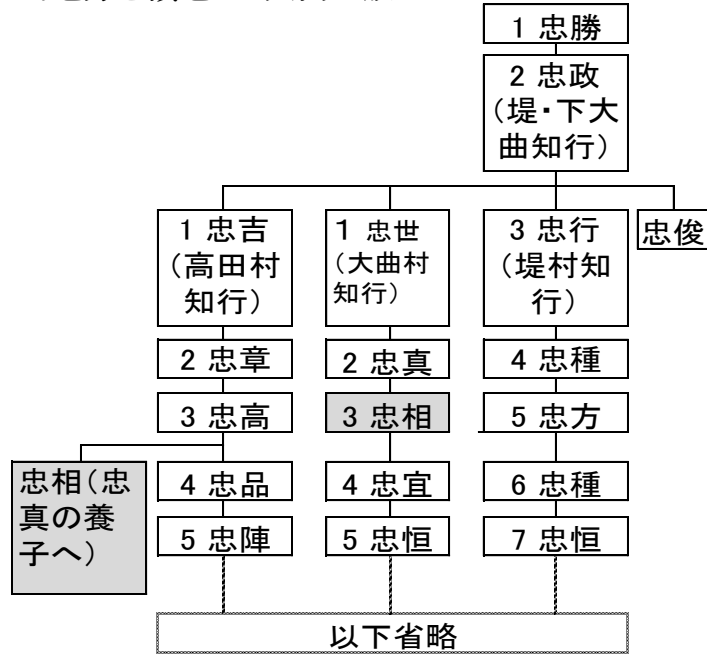
浄見寺を開山したのは隣村の芹沢村、来迎寺の住職であった深誉田察と伝わる。この人は三河の人だった。また寺の東南には忠政の頃の陣屋の跡がある、とされている(文献①『新編相模国風土記稿』堤村)。

大岡(忠世・忠真)家を継いだ越前守忠相の知行地の(下)大曲村を、権現様(家康)から「御朱印状」(領地安堵証明書)をいただいた地として手放さず、幕末まで守り抜くことになる。

大岡一族はこの地に旗本の御家を三家創設し、(後にもう一つ分家を作り計四家となる)そのうち二つは大名家に出世することになった。名譽なことである。



当地方を領地した大岡一族



菩提寺の名の「浄見」は忠勝の法名から取ったもの。大岡家父祖の地堤村のこの寺も二家の拠り所として大切に守られた。

旗本の「家とは今で言う「会社」、「組」とでも考えればよいだろう。主君が出世して領地が増えれば、その家来も栄える。家臣の家も二家に分かれた、つまり発展したということになる。

「家の禄」についても少し触れておく。家を継いで、その後お役に就いて江戸城に出仕、今で言えば「国家公務員」としての勤務が始まれば新たにその役職にふさわしい給与が与えられることになる。忠相は一六八

七年に第五代将軍綱吉に御目見えし、一七〇〇年、当主の忠真の死により家督を継ぐ。ここで、家禄一九〇石を引き継いだ。

それから以後は一七〇二年に書院番として出仕する。以後順調に努めて一七〇二年には遠国奉行になる。遠隔の徳川家領を管理する役職、地方事務所長、というところか。その一つの「山田奉行」に任命される。支配地は宇治山田、つまり伊勢神宮が管轄である。このあたりは「地方行政官」としての忠相というまとめで別に紹介したい。

途中一七一六年に普請奉行になっているが、その後一七二七年、ついに地方行政官の上がりポストとして有名な江戸町奉行になる。

ちなみに、その上がりポストとなってもまだ扶持、禄高は三千石程度だったようだ。これは抜擢人事と言われるが、順当だと言っ人もいる。ただし、普通六〇代で就くことが多いこの職に四〇代で就任したこと、任期は特に決まっていなかったとはいえ、旗本に人気のあるポストで激務でもあるゆえ普通五、六年程度で勤め上げるのにもかわららず、元文元年(一七三〇)までほぼ二十年の長きに及んだというのは、やはり特別な人事だったと言っべきだろう。

そして、この年に寺社奉行に昇格する。ここまではよく知られている。しかし、これがどういう意味を持つ人事なのか、ちよっと考えなくてはいけない。忠相はもう六〇歳近い。普通なら引退、隠居してもよい年齢である。しかもこのポストは普通五〜一〇万石クラスの大名が就く重職である。実は若手大名の登用門だ、ともいう。「世間知らず」の中でやりにくい面はあったらしいが(人格と経験で?)うまく勤めた、という

文献② 辻澤也『天岡越前守』一〇二頁。

ということでは忠相は大名格になるが、臨時加増だから一萬石は家禄(知行量)ではない。ところが、さらに一七四八年、家禄一萬石の正式の大名家に出世する。寺社奉行就任十二年後のことだ(文献③『新訂 寛政

重修頭家譜」二六二〇七頁)。まさに異例の人事だ。

旗本が取り立てられて大名になる例は他にも、例えば柳沢吉保、大岡忠光、田沼意次などがあるが、多くは將軍の側近から昇進したものである。忠相のような例は他にはない。江戸時代唯一だ、ともいわれるがどう違うのかは説明が難しいようだ。「役職の功績を評価されて」などと表現されている(文献④『ちがさきと大岡越前守』三三頁。「実力」と言つと差し障りがあるからか。「実務上の必要からこの地位、職についてもらう必要があつた」という説明はどうだろう。具体的に言えば、町奉行時代から関わっていた「法制度改革」という大事業を引き続き担当してそれを仕上げてもらいたいから。具体的には「公事方御定書」のことだ。

この編纂の発端は享保五年(一七二〇)、八代將軍徳川吉宗が評定所に対し、各種犯罪者に対する量刑の基準をあらかじめ設定しておき、個々の判決に際しては罪の軽重を勘考して加減するように命じたことにあるといわれる。このときは町奉行大岡忠相が担当し、一七二四年「享保度法律類寄きようほうどほうりつるいよせ」という一四類八六条の法規集を呈出した(文献⑤日本大百科全書三ッポニカ)。

引き続き一七四七年に「公事方御定書」の編纂が命じられた。これは幕府の最高裁判機関「評定所」の担当だ。

ここに長すぎた町奉行はひとまず終了して、あらたに寺社奉行になつてきた忠相がベテランとして参加する。「評定所」のメンバーには「町奉行一名」のほか、「寺社奉行四名」も含まれている。「このために忠相が待ち構えていた」ようにも見える。これは筆者の想像に過ぎないが、そういう筋書きだったのかもしれない。

大石愼二郎著『大岡越前守忠相』文献⑥(五六頁)によれば、いわゆる

「享保の改革」の全期間、この役職評定所一座を占めていたのは大岡忠相ただ一人である。

寺社奉行は大名の就く役職だった。すでに家禄は五九二〇石にまで増されていたが、一万石までの不足分は役高として与えられていた。世襲の家禄(家受け)がれる儘置とせず、役を離れたら元に戻す、という前提で任官する仕組みがすでに吉宗によって制度化されていた(足副一七三年)。職務手当のような加増である。家格に縛られ適任者を選ぶことができない、という人材登用の障害を取り除く知恵だ。これが「大名格」「万石の格」という表現を生む。ところが実際に「公事方御定書」の編纂が命じられた後すぐに忠相は正式の大名となつてしまつたのである。

『江戸幕府役職集成』文献⑦(二四頁)によると、大岡越前守は「五九〇〇石の格」で一七二六年に寺社奉行となり、「役高」を加え「万石の格」を受けて「雁の間席」となつたとある。さらに奉養會を兼帯して「役高」を「知行高」に加増され、「一万石の大名」となつて寺社奉行を続けた。七五歳の老齢で寺社奉行を引退したが、彼がもつと若くして寺社奉行をつとめていたら、老中にまで昇進したであろう。

『ちがさきと大岡越前守』の三四頁には次のように記されている。

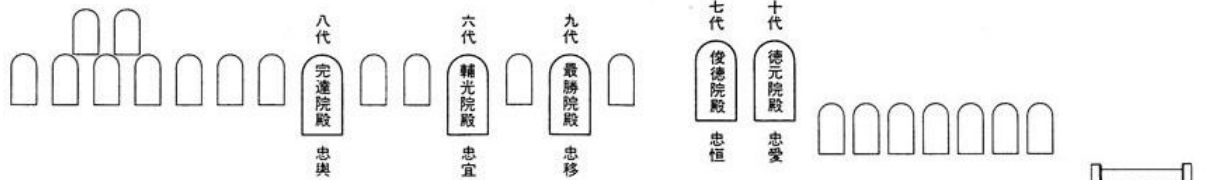
家禄として知行(領地)となつた支配地は、加増に伴い各地に分散

していた。それは相模・武蔵・上総・上野・下野の五方国に及んだ。大名に取り立てられるに当たつて、それを整理したい、しなくてはならない、ということになった。ここで、普段から世話になつてゐる先輩の、若年寄板倉佐渡守忠清に相談した(実真な弟相様らしい)。権現様の御朱印で下された地、相模国高座郡(下)大曲村の領地は大岡家にとつては特別な地だから、とこだわつたのであつた。



茅ヶ崎市堤の浄見寺  
大岡家一族墓地内 大岡忠相墓碑  
一族の墓地は市指定史跡になっている

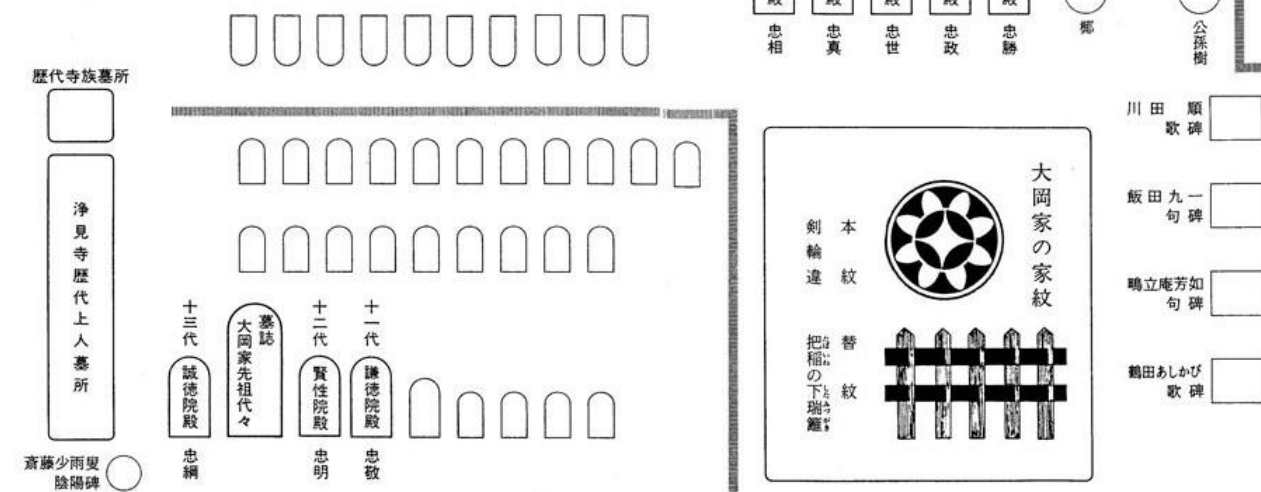
【引用・参考文献】  
 文献①雄山閣版大日本地誌体系21『新編相模国風土記稿』第二巻 二九〇頁  
 文献②『大岡越前守』 辻達也著 中公新書 一九六四年  
 文献③『新訂 寛政重修諸家譜』第二六  
 文献④茅ヶ崎市史ブックレット12『ちがさきと大岡越前守』大口勇次郎 著 二〇一〇年  
 文献⑤『日本大百科全書』(ニッポニカ)  
 文献⑥『大岡越前守忠相』 大石慎三郎著 岩波新書 一九七四年  
 文献⑦『江戸幕府役職集成』 笹間良彦著 雄山閣出版



浄見寺 大岡家墓地略図

『大岡越前守と浄見寺』から転載

茅ヶ崎郷土会編集 大岡奉賛会昭和63年刊



## 鎌倉古道 改めて検討

平松和弘

「鎌倉古道とは」として、『国史大事典』や、茅ヶ崎郷土会の創設者の一人の故山口金次さんの文面などにあたってみた。

吉川弘文館刊『国史大事典』第三巻には、鎌倉街道について次の記述がある。

鎌倉街道は、鎌倉を中心として放射状に走る主要な道筋で、鎌倉幕府開設以来、各地から「鎌倉へ向かう」中世および近世古道の呼称である。

同じ道筋でも鎌倉から地方へ向かう場合は武蔵路・信濃街道・上州路などとよばれた。

鎌倉街道の名称のはじまりは不明だが、『新編相模国風土記稿』や『新編武蔵風土記稿』などに「鎌倉街道」や「鎌倉海道」「鎌倉より奥州への街道」などとみえるところから、おそらく江戸時代のことであろう。

それ以前は、『吾妻鏡』などでいう「鎌倉往還」が古く正しい呼び名と思われる。

一般には『太平記』『梅松論』にみえる上ノ道(武蔵路)・中ノ道・下ノ道が、後世鎌倉街道とよばれる主体となった。

上ノ道は、化粧坂(神奈川県鎌倉市)―洲崎(同)―渡内(藤沢市)―柄沢(同)―飯田(横浜市)―瀨谷(同)―鶴間(東京都町田市)―木曾(同)―小野路(同)―関戸(多摩市)―分倍(府中市)―府中(同)―恋ヶ窪(国分寺市)―

野口(東村山市)―堀兼(埼玉県狭山市)―菅谷(比企郡嵐山町)―鉢形(大里郡寄居町)―雉ヶ岡(児玉郡児玉町)から上野・下野・信濃方面に通じた。建久四年(一一九三)源頼朝の入間野・那須野の狩や、元弘三年(一一三三)新田義貞鎌倉攻めの進路になっている。

中ノ道は、山ノ内(神奈川県鎌倉市)―小袋谷(同)―大船(同)―笠間(横浜市)―永谷(同)―柏尾(同)―秋葉(同)―名瀬(同)―二俣川(同)―鶴ヶ峰(同)―白根(同)―中山(同)―荏田(同)―是政(東京都府中市)―府中で、ここで上ノ道と合流した。文治五年(一一八九)奥州征伐の頼朝軍の進路や元久二年(一一〇五)畠山重忠が菅谷の館から軍を發して二俣川で討死したときの路程である。

下ノ道は、中ノ道の永谷から分かれて、最戸(横浜市)―弘明寺(同)―井土ヶ谷(同)―岩井(同)―帷子(同)―神大寺(同)―片倉(同)―新羽(同)―日吉(同)―丸子(同)―池上(東京都大田区)―新井宿(同)―芝(港区)―忍岡(台東区)で、これより房総方面へ通じた。元弘三年(一一三三)、義貞鎌倉攻めの援軍として千葉貞胤軍が南下した進路である。

このほかの主要幹線は、京都から美濃路を経て東海道筋を東下し、足柄または箱根峠をこえて鎌倉に至る「京鎌倉往還」があつ



た。

茅ヶ崎市の海岸部を横断している鎌倉街道は「京鎌倉往還」の一部である。山口金次さんはこの道筋を検討し、昭和三十五年十二月一日発行の茅ヶ崎郷土会編集『郷土茅ヶ崎』改巻第三号に「鎌倉古道と茅ヶ崎の板碑」を発表している。この論文は、昭和四十八年に市教育委員会から発行された『郷土茅ヶ崎』下巻二九頁くに採録されているが、すでに長い年月が経っているので、山口さんが示した道筋を、ここにたどってみることにする。なお、山口さんの文章に、わかりやすいように段落に番号を付けた。

① 足柄箱根を東へ越えて西湘の山や谷、西郡の平地を横切り、相模川は河口に近い下町屋で渡る(ママ)鎌倉への道は、海岸沿いに一筋、中島の本宿より二ッ谷で南に岐れて、柳島の船着き場の河岸へと、途中、左の松尾を経て鳥井戸は御霊神社の辺りを上町(筆者注 かみちょう)に入り、金剛院の横を国道は第六天の前より少し東左へ入る小道へと、神明社の鎮座する砂丘のあたり梅田小学校から、電源開発の敷地あたりで道は消えているが、更に見通せば北茅ヶ崎駅の踏切りへと続いていたのである。

② 一方中島の二ッ谷より東へ、国鉄の踏切を越えて少し歩くと、坂田農園の真ん中を筏川と小字のある小流れを、水門口の堤上に見て、小出川の東側下にある池の旧相模川の古橋脚は、建久九年稲毛三郎重成が亡妻(北条政子の妹)の追善供養に架橋したと伝えられ、杭の間は横三本の幅、四間位あり、檜の杭であると、紋章学の沼田頼輔先生がお調べになった。大正地震の時に、田面に飛び出したのが一本、現在は七本になっている。この所より国道へ出て、直ぐ左へ入る。梅雲寺の前、藪畳みの中を過ぎ

ると、眼前に鶴嶺八幡宮の森が見えて来る。更に進むと野道から八丁、大門の松並木道に出る。常光院の僧朝恵の植松である松並木の下を、お宮に向かって反り橋まで通る。森巖の気に満ちた社殿や境内。その昔、源氏に由縁の深い懷島氏の五輪塔十基は、社の後ろの龍前院にある。横大門を東へ、浜之郷の登象(筆者注のぼりぞう)という小字のたんぼ道は、矢畑の蔵屋敷跡の前より丸富の工場(筆者注 現トピー工業の工場)の中へと道は消えているが、これを更に進んだ所が北茅ヶ崎駅の踏切で、前記の道へ合する。

③ また一方、前鳥の郷四之宮(祭神、土木の神、免道雅郎。水陸交通の要地)(筆者注 正しくは菟道羅郎子 うじのわきいらつこ)の前鳥神社下で相模川を渡ると、田端の神之倉か、萩園の権現所(今は向町)へと堤を下る、子之権現の旧地のある所、三谷辺り(新倉家付近出土の板碑)から古川を東へ、萩園の八王子往還を横切り(石井幸次郎家前より出土の板碑)学校道をたどり、小出川の橋を渡り、地藏ヶ淵の堤より南へ下り、鶴嶺小学校の北側より横大門を佐塚明神社の旧地や、鶴嶺八幡宮の前より登象の道へ合する。

④ もう一つは鎌倉時代の田村には三浦義村の別業館ありて、將軍の頼経がはるばる京都より渡る時に、館より相模川を越えて上町屋(今の一之宮)より大庭の城へと、鎌倉入りする心構えをしたのもこの道であった。

田村の渡し(現在は神川橋)の河原から大山不動尊の小社前を過ぎ、宿の西端にある梶原屋敷(筆者注 今は天神社)を右に見て、左に南泉寺(板碑あり)、更に岡田の安樂寺へ出る。創立はかなり古い(板碑一枚保管)、後ろの山に前方後円墳あり、その培塚

に副葬品がかなり出土し(板碑、北野氏蔵) 寒川神社に保管されている。

それより東岡田、三留氏に至り(板碑保管)、南へ小出川の鏡橋を渡り、下寺尾の七堂伽藍跡(板碑、鶴田栄太郎氏蔵)、大曲(板碑、岩崎氏蔵)より、香川の七面堂の下、馬場道より玄柵寺(小板碑蔵)脇へ進み、仲尾(板碑、熊沢伊助氏蔵)を通り大道路の傍ら、ドンドン塚あたりに出る。

右に富士山を中心に、大山、丹沢、左方、箱根、天城を従えた如く連なり、眼界は開けて来る。この景色の下に、円蔵、西久保、浜之郷、矢畑が、懐島の名の如くに旧河川敷の真中にそれと判る。その懐島山宝生寺に阿弥陀三尊の種子のある安山岩の板碑(宝蔵坊に断片)がある。右側の小高い砂山の上には円墳があったが、埋め立てのためにすっかり平地になり、出土品かなりあったがめぼしいのは某氏が保管せられたようだ。左には相模横山の連続した中腹には、横穴古墳が十指に余り、往年発掘された弥生式の土器や副葬品も多数あった。赤羽根の神明宮の辺り、万蔵院の旧地より県営水道の送水管埋設の折出土した板碑は、菱沼の長福寺(庄司隆玄師)に附近出土の板碑も共に保管せられている。

⑤ これより先は、小和田の方へも、一方、さらに大道路は東へ二ツ谷、四ツ谷(筆者注 藤沢市)へと続いているが、鎌倉への道は前記、北茅ヶ崎駅の踏切を過ぎて茅ヶ崎本村へ入る(板碑、岩沢佐次郎氏蔵)。続いて茅ヶ崎高校の裏手より松林中学校の前、更に小和田の熊野神社の後ろを上正寺(板碑、保管)に至る。一面、砂丘である。水島家にも同年頃の板碑があり、これより少し東へ進み、国道を横切って、辻堂駅西側の国鉄踏切を過ぎる。辻堂である。序でに北町の玉珠寺(筆者注 宝珠寺の誤植)(板碑、延

文年号) 辺り、砥上ヶ原のただ中であろう。鶴沼を通り片瀬、腰越、右に江之島をながめて、七里ヶ浜・稲村ヶ崎より、極楽寺に至り、鎌倉の大手である。

この様に茅ヶ崎の地を幾筋かの鎌倉道の通っているのは、一つには相模川を控えた土地、交通の要地であるからである。終わりに小出区、芹沢の蓮妙寺にも一基あるが、これは北方よりの鎌倉道であろうと思う。さらに打戻方面にも(板碑、加藤丘之助氏蔵) 探したら、未だ外にも存在しているはずです。

(昭和三十五年六月八日 記)

山口金次さんの文面を、現代文に直し注釈を加えてみたところ、次のようになった。

① 相模川は河口に近い下町屋で渡り、海岸沿いに一筋、中島の本宿より二ツ谷で南にそれて、柳島の船着き場の河岸へ。途中、左の松尾を経て、鳥井戸は御霊神社の辺りを上町に入り、金剛院の横を、国道は、第六天神社の前より少し東左へ入る小道へと。茅ヶ崎市青少年会館の南側を東に向かい、神明社の鎮座する砂丘の辺り(本社ヶ丘)を過ぎて、梅田小学校から、電源開発の敷地辺りまでと、体育館・市民文化会館南側と中央公園から、その先は、北茅ヶ崎駅の踏切へと続いた。

② 一方、中島の二ツ谷より東へ国鉄の踏切を越えて少し歩くと、サカタ農園の真中を筏川という小流れを、水門口の堤上に出て小出川の東側下にある旧相模川橋脚に至る。ここより国道に出て直ぐ左へ入る。梅雲寺の前、藪畳の中を過ぎると、眼前に鶴嶺八幡宮の森が見えてくる。更に進むと野道から八丁、大門の松並木に出る。松並木の参道を御宮の方へ反橋まで歩く。

鶴嶺八幡宮の社の後の龍前院には、源氏に由縁の深い懷島氏の五輪塔十基がある。鶴嶺八幡宮の横大門を東へ浜之郷の登象を経て、矢畑の蔵屋敷跡の前より丸富の工場の中へと道は消えているが、この先は、北茅ヶ崎駅の踏切へと続く。

③ 他に、平塚四之宮の前鳥神社下で相模川を渡ると、田端の神之倉か、萩園の子之権現所の旧地へと堤を下る。子の権現所の旧地辺り即ち三谷辺りから古川を東へ、萩園の八王子往還を横切り、学校道をたどり、小出川の橋を渡り、地藏ヶ淵の場所より南へ下り、鶴嶺小学校の北側より横大門を佐塚明神社の旧地や、鶴嶺八幡宮の前から登象の道へ合する。

④ 田村の渡し(現神川橋)の河原から大山不動尊の小社前を過ぎ、梶原屋敷を右に見て、左に南泉寺、更に岡田の安楽寺へ出る。これより、東岡田、南へ小出川の鏡橋を渡り、下寺尾の七堂伽藍跡、大曲より、香川の七面堂(浄心寺)の下、馬場道より玄柵寺脇へ進み、仲尾を通り、大山道の傍ら、ドンドン塚辺りに出る。

⑤ これより先は、小和田の方へも、大山道は更に東へ二ツ谷、四ツ谷へと続いている。

鎌倉への道は、前記、北茅ヶ崎駅の踏切りを過ぎて茅ヶ崎本村へ入る。続いて茅ヶ崎高校の裏手より、松林中学校の前、更に小和田の熊野神社の後ろを上正寺に至る。一面、砂丘である。之より少し東へ進み、国道を横切って辻堂駅西側の国鉄の踏切を過ぎると、辻堂である。北町の宝珠寺辺り、砥上ヶ原の只中を過ぎ、鶴沼を通り、片瀬腰越、右に江之島を眺めて七里ヶ浜・稲村ヶ崎より極楽寺に至り、鎌倉の大手である。

上記の内容から推察すると、茅ヶ崎で鎌倉古道とされる道は、旧相模川橋脚と中島の本宿と二ツ谷で南にそれて柳島の船着き場の河岸へ。

途中、左手の松尾を経て、鳥井戸は御霊神社の辺りを南湖上町に入り、金剛院の横から国道に出て、第六天神社の前より少し東左へ入る小道へと進み、茅ヶ崎市青少年会館の南側を東に向かい、神明社の鎮座する砂丘の辺り、梅田小学校から電源開発の敷地辺り、さらに体育館・市民会館南側・中央公園、その先は、北茅ヶ崎駅の踏切付近と本村八王子神社付近と海前寺付近と網久保・菱沼・小和田付近と小和田コミセン前・熊野神社裏と東小和田と藤沢へ。

もしくは、旧相模川橋脚から国道一号を越え、梅雲寺前の古道を東に進み、鶴嶺八幡宮参道の馬頭観音辺りから矢畑の小字貸屋敷から本社が丘と市役所近辺と北茅ヶ崎駅付近と本村八王子神社付近と海前寺付近と網久保・菱沼・小和田付近と小和田コミセン前・熊野神社裏と東小和田と藤沢と推察される。

この様に茅ヶ崎を幾筋かの鎌倉道が通っているのは、相模川を控えた土地で、交通の要地であったからである。なお、鎌倉時代前後は、円蔵の懷島景義(景能)たちの活躍した時代でもあるので、ここで考えられる道の他にも何本も鎌倉古道と言われる道はあったと思われる。

## 風 自由投稿欄

### 活弁に挑戦です

長谷川由美

郷土会会報の二〇二三年一月発行の一五六号(新年号)に、今年是小津安二郎監督生誕二二〇年で、演劇と映画のはじまりに注目していることを書きました。

「演劇&映画のはじまり」小津監督 生誕二二〇年。早くも半年以上経ち、今秋に向け、こんな準備をしています。

音貞オツペケ祭実行委員会主催で、無声映画を二つの手法で上演することになりました。

①声色掛け合い：映像に対して、複数人の役者がアテレコをするような形で上演する方法

②連鎖劇：一つのストーリーを演劇と映像で交互に上演し、映像の時は、声色掛け合いでセリフを合わせる方法

演目「DRAGON PAINTER」蚊龍を描く人」五三分

一九一九年 ハリウッド無声映画

主演 早川雪洲、ヒロイン 青木鶴子

蚊龍(こうりゅう)は、中国の伝説上の生き物で、龍の一種。

原作者は、有名なフェノロサの妻でメアリー・フェノロサ。

ヒロインの青木鶴子は、一九一〇年台のハリウッドでアイドル的人気女優だったそうですが、なんと川上音二郎の姪です。しかも、鶴子がアメリカで暮らすようになったきっかけは、川上一座のアメリカ巡業でした。鶴子は、川上一座の子役として、共にアメリカ大陸に渡ったものの、座員に有り金をそっくり持ち逃げされた一座は困窮。食べるものにも事欠く有様でした。さらにアメリカの法律では、子どもを学校に通わず、舞台で仕事をさせることは許されていないという状況でした。このため、鶴子はアメリカ在住の日本人画家 青木年雄の養女となり、叔父の音二郎や一座とは離れて、アメリカで育つことになったのでした。

一座はその後、アメリカ横断、欧州へと渡り大人気となり、日本に帰国して茅ヶ崎に落ち着くわけですが、この間、鶴子の養父の青木年雄に各地から手紙や写真、雑誌などを送っています。それらは、アルバムに収められ、現在は松竹大谷図書館が所蔵。

二〇一一年、茅ヶ崎市美術館の音二郎・貞奴調査の際に、このアルバムは紐解かれて、中から「茅ヶ崎の自宅にて」と記した一葉の写真が発見されたのでした。これによって、それまで「別荘」と言われていた茅ヶ崎の居宅は、自宅であるとの根拠を得るに至ったのでした。

一方、成長した鶴子は、英語を流暢に話す日本人女優というのでハリウッドで人気となり、早川雪洲と共演のち結婚。当時、とんでもない人気の世界のスーパーヒーロー雪洲の妻となったのでした。この頃の雪洲は、無声映画「チート」が話題となって、



欧米夫人の人気の的。雨の日に雪洲の車が劇場前に着くと、待ち構えていた貴婦人たちが、毛皮のコートを惜しげもなく投げ、彼はその「毛皮カーペット」の上を靴を濡らすことなく歩いた：のだそうです。

今回は、役者チームも初めての活弁への挑戦です。無声映画に活弁士が言葉をつけるのは、日本特有のもので、日本でだけ流行りました。欧米では、上映時には、生演奏の音楽が付き、映像の中に文章で、状況説明やセリフが入っています。

というわけで、当然台本はありません。十月、十一月の活弁公演に向けて、映像と、その中の英語のセリフなどをみながら、セリフを組み立てる作業をしていきます。そして、音楽はシンセサイザーと打楽器の楽士さんについてもらうことになりました。現

## ブログ

### 前田照勝

ブログを書いて何年になるのだろう。職場時代を併せると二十年以上になる。

公開した記事を振り返ることはほとんどしないが、記録することが、自分自身のチェック機能になっている気がする。

最近の大きな出来事は五月三十日に四歳下の弟が亡くなったこと。七月六日に二人目の曾孫が誕生したことだ。悲しみも喜びも味わえるのは生きている証、日々の暮らしを楽しみつつこの暑い

在、やつと台本ができるかな、と言うところですが、生身の人間から発する言葉を、その瞬間、瞬間、積み重ねていく「活弁」で、ぜひ映画が始まった頃のハリウッド作品を、日本だけで流行した手法で楽しんでいただきたいと思っています。乞うご期待。

右の文中にある映画などで、YouTubeで見ることが出来るものは次のとおりです。検索ワードの例です。

- ・チート：早川雪洲
- ・The Dragon Painter…1919
- ・音貞アルバムを紐解く講演会
- ・川上音二郎・貞奴一座欧米公演関係資料アルバム（アルバムの中の写真などがデジタル化され公開されている）

夏を乗り切ろうと思う。

### 預金通帳の行方不明事件（八月十三日）

この数日カミさんが探し物をしている。預金通帳だ。長女とマイナンバーカードを受け取りに行く際に何処かへしまったのだが、その場所が分からなくなったという。

カミさんは探し物をしながら、趣味の手芸用品の布の端切れや小箱などを整理している。終活を決意したかのような勢いである。

そんな様子を心配した長女は次女にSOSを発信した。次女がやってきて一緒にあちこち探していた。一〇分くらい経つたろうか。次女が笑顔で二階から降りてきた。「見つけたよ」と得意

満面である。

さつそく三人でビールで乾杯する。

「良かった、良かった」

「まだ認知症になっていないね!」

『ちよこつと仕舞った。』と言うお母さんの言葉がヒントだったのよ」

「意識しないで置いたりすると、どこへ置いたか忘れるものだよ」  
慰めたり励ましたりと忙しい。

今朝のこと、

「お父さんのメガネが外に置いてあるよ」と長女の声。受け取りに行くと、「まったく、二人揃って!」と批判的な言葉。

「その内徘徊するからさ」

「今でも徘徊してるじゃ〜」と憎まれ口をたたく。

この先、どんな事件が待っているやら…。

**イラストレーター 田村セツコさん** (八月十二日)

八月十日、夜のラジオでイラストレーターの田村セツコさんが登場した。

印象に残る言葉を連発したのでメモする。

・朝起きて、息を吸ったり吐いたりできるのは幸せ。

・困ったことが発生したら脳トレだと思ふ。

・日記でおしゃべりする。

・一人でも自問自答をして会話をする。

・お年寄りを観察するのが好き。

(例) 電車の中でお年寄りがバッグの中に手を入れてゴソゴソしている。

ハムと笹かまぼこをサニーレタスに包んで食べている。食べたあとは澄まして外の風景を見ている。こんなお年寄りにあこがれる。

どんな人物なのか大いに興味が湧いた。翌日にネットで調べてみる。なんと八五歳の女性だった。イラストレーターの草分け的存在だという。そのしつかりした語り口、声も若々しくどこまでも前向きな姿勢に感動した。是非ともネットで検索して確認して欲しい。

現実の世界だけではなく、ラジオやテレビでも新たな出会いがあるものだ。  
だからこそ生きていることは幸せなのだ。

【田村セツコさんのプロフィール】

イラストレーター、エッセイスト。一九三八年東京生まれ。一九六〇年代に『少女ブック』『りぼん』(集英社)『なかよし』(講談社)の表紙やおしゃれページで活躍。一九七〇年代には文具や小物などの「セツコ・グッズ」で一世を風靡。一九八〇年以降、ポプラ社の名作童話に挿絵を描く。現在は絵日記教室の講師ほか、年に数回の個展、講演会などを開催。『あなたにあえてよかった』(興陽館)『人生は「ちそう」』(あさ出版)など著書多数。

**ハンチバッグ** (八月十日)

芥川賞を受賞した市川沙央著の『ハンチバッグ』を読む。今朝の新聞に書評が載っていたが、購入したのは昨日のことである。この書評は切り抜いて本に挟んでおこうと思う。

毎年、芥川賞や直木賞などの受賞者の発表があるが、すぐに飛びついて読んだことはない。難病による症候性側弯症および人工呼吸器使用。このフリーズに心を惹かれたのだ。

著者は、一四歳時から人工呼吸器を使用。三十年余り不自由な生活を送りながら、このような賞に辿りついた軌跡を少しでも感じたいと思った。小説の内容にも興味があるが著者がどんな人物なのかを知りたくなった。

昨日から今日にかけて一気に読んでしまった。読後感は読んではからのお楽しみ、ラジオ体操仲間に回そうか、いや女性には勧められないかな？ 迷うところだ。

### メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲 (八月九日)

今朝いただいたCDを聞きながらの更新中である。ラジオ体操仲間のお孫さんがヴァイオリンの発表会だった。「曲目はなんでしたか」と尋ねるとメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲の第三楽章だと言う。有名な第一楽章のメロディーを口ずさむと「そうそう」と頷く。

前回の発表会の際は第一楽章だったそうだ。前回と今回の分をCDにしていた。演奏者による比較などはできないが、プロのCDと変わりが無いように思った。それにしてもピアノとの掛け合いもスムーズで、ここまで来るにはどれだけ練習をしたのだろうか？ 一日何時間くらい練習をするのだろうか？

高一のお嬢さんは四歳からヴァイオリンを始めた。中学三年生時にプロと一緒に演奏ができるオーディションに合格したのだそうだ。

すばらしい！ これだけの演奏を人前で弾けるなんて。こちら

まで感動が伝わってきてジーンときた。身内の方々の感動ぶりはいかがだろう。さぞかし想像を超えているに違いない。ここまで書いてCDが終わった。もう一度再生して聞き直している。

なんていい時間なんだろう。ありがとう！

(二〇二三年八月十五日 記)

## 会員募集

### 茅ヶ崎郷土会

郷土に伝わる信仰や祭礼、歴史や伝説、史跡や文化財を楽しむサークルです。

**活動内容**○市内・市外の史跡見学会を年に数回

- 郷土の歴史・民俗の勉強会
- 大岡越前守遺跡写真展
- 会の活動・市内風景・市内で見る野鳥等の写真展
- 会報『郷土らがさき』年に3回発行

### あなたも一緒にはじめませんか！

年会費 1,500円

設立は昭和28年(1953)4月

会員、約70人

### 連絡先

Tel 0467-53-2453 携帯 090-8173-8845 平野文明

## 茅ヶ崎郷土会の事業報告など

## 第三〇五回 史跡・文化財めぐり

## 茅ヶ崎市内の大山道を訪ねる③

## 円蔵・西久保地区

## 平野文明

日時 令和五年七月八日(土) 参加者 一四人

コース 茅ヶ崎駅集合(バス)ーバス停「円蔵」下車(徒歩)

歩)ー①④円蔵①神明大神②了覚庵跡とその近くの  
共同墓地(領主の大田氏と横山氏墓石など)ー③輪光寺④  
日枝神社・鶴田栄太郎の和合神句碑ー⑤⑧西久保⑤北  
向き地蔵など⑥宝生寺⑦日吉神社・大山道標など⑧か  
っぱ徳利ひろば【解散】

茅ヶ崎市の中央部分を「田村通り大山道」が東西に横切っています。これを令和三年から三回に分けて訪ねました。今回はその最終回で、さらに西に進むと寒川町になります。小雨の予報も出ていましたが、高曇りの一日で、全コースを無事に回ることができました。

郷土会の史跡・文化財めぐりは、事前に探訪地の学習会を行います。今回は六月十三日(火)午後、市立図書館で行いました。**円蔵・西久保地区** 今回訪ねた大山道は、その南側に江戸時代の

円蔵村・西久保村が東西に並び、北側は香川村で、大山道が村境となっていました。

江戸時代から明治時代まで、大山山頂への登拝は男性のみ、旧暦の六月二十七日から七月十七日までのお盆を挟んだ夏山の間だけ開かれました。この期間は特に多くの「お導者」(参拝者)が大山を目指しました。今も、現行暦の七月二十七日に阿夫利神社境内の登拝口で山開きが行われています。

しかしその後、大山参りにこの道を使うことは少なくなりまし  
た。また自動車の時代になっても行き交う車をさばくだけの道幅  
は変わらず、さらに東海道(国道一号)のバイパスが平行して景観  
が変わったのです。私たちは大山道を歩くことは止めて、円蔵・  
西久保地区に残る大山信仰の遺跡を訪ねました。

いつものように、午前八時五〇分までに茅ヶ崎駅改札前に集ま  
り、バスで円蔵を目指しました。

## ①円蔵の神明大神(しんめいおおかみ) 円蔵2282

円蔵の鎮守です。『新編相模国風土記稿』(以下『風土記稿』と表記)  
円蔵村の項に、神社は「懷島権守居跡にあり」、「広さ七千坪、今  
なお堀の跡や馬場の跡があり、また岩見屋敷、近藤屋敷と呼ばれ  
るところは懷島権守景能(ふところじま、こんのかみかげよし)の御家人  
たちの住んだ跡と伝わっている」、景能は「鎌倉の若宮大路に住ん  
でいたが、疑いをこうむり、支配地であるこの地に蟄居し、疑い  
が晴れてもここに住み、卒年は承元四年(一一二〇)、この地で亡く





景能は右膝に矢傷を負っていました。『吾妻鏡』の建久二年（一九二）八月一日の条（文獻①）に、その傷を受けたときの様子が記されています。頼朝が鎌倉に入り、新造の大倉幕府の建物に完成し、この日は雨のために、景能は仲間と酒を飲みながら次の様な昔の話をしました。

保元の乱の折、自分は敵の鎮西八郎源為朝と向かい合った。お互い、馬にまたがって弓を構えた。その時、自分は考えた。弓で為朝にはとてもかなわない。しかし自分は東国武者だ。馬術では勝っている。為朝の馬手（めて）右手、つまり右側に回ろうと。そうしたところ為朝は弓手（ゆんで

なったのだろう」と記されています。『風土記稿』は江戸時代の天保十二年（一八四二）にできているので、景能の死から六三〇年ほどたっており、記されていることの真偽は分かりませんが、事実なら茅ヶ崎にとって重要な歴史の一コマです。発掘調査が行われて然るべきと思われるが、屋敷跡探求のための調査は行われておりません。堀跡と伝わる場所も次第に分からなくなっています。調査の必要性を訴えます。







「左手、つまり左側に向けていた弓を、乗っている馬の頭を越して右側に回し、一の矢を撃たざるを得なくなつた。為朝が弓手で射たなら自分は殺られたはずだが、この一瞬の判断で、矢は右膝を貫いただけだった。一同に言っておきたい。「勇士は騎馬に達すべき事なり」と。

加藤幹雄会員が主役の懐島景能となり、平野が為朝となつて、景能の館跡と言われる神明大神の境内で、この一幕を再現してみました。山本俊雄会員は為朝が

乗る馬の頭の役をしました。一幕の再現はうまく行つたのですが、時間がなくなり他の説明は割愛しました。

小山章治会員の案内で、神社の裏手から、景能館(かげよしかた)を囲んでいた堀跡と伝わる場所を見ました。畑の畦のような所で、説明されなければそうとは思えない状態でした。近くで住宅の新築工事も行われていて、屋敷跡が次第に宅地化される現実にも直面しました。

②了覚庵跡と近くの共同墓地(円蔵村の領主大田氏と横山氏の墓碑など) 円蔵2178の辺り

了覚庵跡には、昔、庵として使われていた建物と、江戸時代の



円蔵村の領主大田氏の墓碑のほか、おそらく庵主たちのものと思われる墓碑、句碑などが残っています。

大田氏は代々松平家に仕え、『寛政重修諸家譜』(文献②以下『寛政譜』)に四代とある吉正は天正十八年(一五九〇)小田原の役に従い、翌十九年五月三日、相模国高座郡の内に二百石の地を宛がわれました。これは円蔵村のことで、大

田家と茅ヶ崎の関係の始まりです。吉正は、元和元年(一六一五)の大坂夏の陣の徳川氏凱旋ののち、相模国愛甲、下総国葛飾の内に加恩されて、合わせて千六十石を宛がわれ、寛永二年(一六二五)十二月に朱印状を賜りました。その後も同十年遠江国榛原(はいばら)郡内に千石を加えられ、すべて二千六十石の大身となり、同十五年(一六三八)に亡くなり、三河国碧海郡(へきかいぐん)佐々木村の上宮寺に葬られたと同書五五頁にあります。

さて、了覚庵跡にある大田氏の墓碑は二基あり、向かつて右の石塔には「大田善大夫吉次之墓」とありますが年銘などはありません。吉次(よしつぐ)は五代目で、『寛政譜』には「延宝八年(一六八〇)十月十五日死す。年六十八。法名別道。相模国高座郡圓蔵村に葬る」と五六頁に記されています。

この吉次の墓碑について『風土記稿』二八八頁、円蔵村の項に



は吉次のおくり名に基づくとしています。

この吉次の墓碑の向かって左側の碑は、その右側面に「元和五己未(二六一九)三月二八日」、正面に「法性院殿釋義空了禪居士 正定聚位」とありますが、『寛政譜』にはこれに相当する人物がなく、『風土記稿』にも記述がありません。山口金次さんは自著「茅ヶ崎市内に現存する大名・旗本墓碑一覽」(文獻③)に、先に紹介した四代「吉正の墓か」としていますが、墓碑にある卒年、法名は『寛政譜』の吉正の記載と違っています。この墓碑が誰のものなのかは今後の課題です。

境内にある句碑 **鳴たつやはや須磨寺の夕念仏** の作者は「法師了學」、碑の裏に「弘化四年(二八四七)四月五日寂 往年七十四歳」とあります。了覚庵で、少し早い時刻から始めた夕念仏を詠んだのでしょうか、それを須磨寺の夕念仏とかけたのはなぜでしょうか。神戸市の須磨寺は一ノ谷の古戦場の近くにあるので、戦死者の供養念仏の意味を持たせてあるのだと考えても、了覚庵の念仏に重ねた理由が分かりません。どなたか解いて頂けませんか。この句碑は以前に撮影した了覚庵境内の写真には写っていないの

「了覚庵、元の地頭大田善太夫吉次が菩提の為に建つ。吉次、法諡(ほうし)死者に付ける名」を了覚院という。延宝八年卒。庵の側にその墓碑あり。(庵には阿弥陀を置く。」と記され、了覚庵は吉次の菩提を弔うために立てられて、庵の名

で、他所から移設されたものかも知れません。また大山信仰に関係する石碑もあります。浅草観音と大山不動尊に三十三度お参りした行者了察が、記念のために寛政七年(二七九五)に立てたものです。

了覚庵と道路を挟んで共同墓地があります。その中の個人墓地の一角に、円蔵村のもう一人の領主だった横山氏の墓碑が並んでいます。これらは山口金次さんの前書(文獻③)の七二頁に報告があり、また、神崎彰利著「茅ヶ崎市域における近世の領主たち」(文獻④)に横山氏累代の説明がありますので、これらを踏まえて別の機会に紹介しようと思っています。

了覚庵跡と共同墓地に残る領主たちの墓石などは、江戸時代の歴史を語る貴重な遺跡です。

③真言宗 天慶山地蔵院輪光寺 円蔵2238  
ご本尊は木造の地藏菩薩です。

田村通り大山道には、円蔵・赤羽根境の鷺茶屋と、西久保・大曲(現寒川町)境の間門(まかど)に茶屋があつて、導者相手に商売をしていました。輪光寺のご本尊は鷺茶屋で出開帳したという話があります(文獻⑤)。



円蔵村の領主 横山氏一族の墓碑





この庚申塔の向かって左側の六地藏は、前記した領主横山一族の供養塔になっています。

茅ヶ崎郷土会『ふるさとの寺と仏像』76頁 昭和52年刊行



輪光寺本尊 地藏菩薩

本堂のご本尊を拝観させて頂きました。本堂にはご住職が制作された不動明王も祭ってあります。

境内に、昭和四十四年茅ヶ崎市指定重要文化財の「輪光寺の

庚申塔」があります。江戸時代初期の寛永十七年(二六四〇)の銘があり、見ざる言わざる聞かざるの三猿があるところから庚申塔に分類されています。庚申塔に三猿は付きものですが、その出現期のものと考えられています。ただ問題も含んでおり、造立者銘に、普通なら石塔には使われない文字が使われているのです。

その隣に飯田九一の句碑があります。

うたかたを川のすだまにおそまつり 「うたかた」は川面(かわも)を漂う泡、「川のすだま」は河童、「おそまつり」は「うそまつり」と読むのかもしれませんが、川獺(かわうそ)たちの川辺での祭りです。「流れる水の泡を河童にそなえて川獺たちが祭りをしてる」という意味なのでしょうが、そのように言い換えるのは野暮だと思えます。川霧に包まれた架空の世界の雰囲気を楽しむ句でしょう。河童徳利の伝説を踏まえています。

裏面に、この徳利が行方不明になり六十年ぶりに戻ってきたことを喜んで、という建碑の理由が書いてあります。昭和四十二年(一九六七)のことだそうです。建碑役員の中に鶴田栄太郎さんの名もあります。しかし残念なことに、河童徳利はまた移動して、今はこの地にありません。

④日枝神社・鶴田栄太郎の和合神句碑

輪光寺から少し南にたどった分かれ道の角に日枝神社があります。その入り口に、道路に面して鶴田栄太郎の「春や春岐路に立てと(ど)も和合神 あしかび」の句碑と「道祖神」と彫った文字塔が並んでいます。これらは以前は、道を挟んだ向こう側にあり、その頃は「安永五申天(二七七〇)十二月吉日」の銘を持つ双体道祖神でした。それが、共に現地







に移され、その後、双体道祖神は境内の奥に移され、代わりに文字塔が立てられて今の姿になったのです。前頁に、句碑と双体道祖神が並んでいた頃の写真を載せておきます。「あしかび」は鶴田さんの号です。「岐路(きろ)」と「和合」を対比させた面白さを匂にしたのでしょうか。鶴田さんは茅ヶ崎郷土会の設立者の一人であるいろいろな業績を残しています。そのことは源 邦章会員が「郷土史の先達 鶴田栄太郎さん」(文献⑥)にまとめています。

以上で円蔵地区の見学を終わり、西久保に向かいました。

西久保村は『風土記稿』西久保村の項に、江戸時代の初めは「円蔵村の枝郷で、村名を本社村と号す」とあります。その頃、円蔵・浜之郷・矢畑・西久保の村々は、名前も村の範囲も未確定のところがあったようです。

江戸時代になって西久保村を宛がわれたのは石川永正(ながまさ)

日枝神社境内に、阿夫利神社と大山寺の御札が箱に収めて道路に向けて立ててあります。御札は三枚あり、中央が神社からの、両脇が佛寺からのものです。「円蔵辻和合」とあるのは御札を受けてきた大山講中の名前でしょう。今ここに建てられているのは、昔、夏山の期間中に大山燈籠を立てた場所だったからと思われま



ます。しかしこの三〇〇石は今の西久保村(本社村)ではなく、大和市内の上和田村に二七〇石三斗、懐島本社之内(西久保村)に二九石六斗だったので(文献⑦)。

⑤西久保の旧道に立つ北向き地蔵その他

西久保の中央を南北に古道が通っています。古道から宝生寺に向かう辻に「北向き地蔵」があります。道端にあるお地蔵様は、いつも村々を歩いていて人々を救っていると言われ、立像が多いのですがここは座像です。地蔵様が座っている石(笮石という)は道しるべで、「右 子権現(ねのこんげん) / (改行) 北 一之宮 / 左 南湖 / 道」と彫ってあります。地蔵

という旗本です。『寛政譜』第三の四一頁に「東照宮(家康)に奉仕し、天正十九年(一五九二)五月三日、御朱印を下され、相模国東郡高座郡のうちにおいて采地(領地)三百石を知行す」とあり



に向かつて、右に進めば萩園の子の権現、左に行けば南湖、旧道  
を北に進めば一之宮(寒川町)に通じるといふことです。お地蔵  
様が作られたのは江戸時代末期の文久二年(一八六二)、西久保村  
の念仏講中に依つてと彫つてあります。

北向き地蔵の近くの辻にも、双体道祖神(安永年間一七七二〜八二  
と、自然石に「道祖神」と彫つた文字塔(明治三十一年 一八九九)と  
青面金剛を彫つた庚申塔(万延元年 一八六〇)が立っています。三  
基あることから石仏の形の時代による変化が分かります。

⑥真言宗 懐島山宝生寺―西久保五四六

茅ヶ崎にある唯一の国指定重要文化財は、宝生寺に祭られてい  
る「銅造阿弥陀三尊立像(どうづくりあみださんぞんりゅうぞう)」です。

長野県長野市善光寺の本尊は、日本に最初にもたらされた仏像  
と伝えられていて、絶対の秘仏とされています。その様式は他の  
阿弥陀三尊像と違う特徴を持っています。その一つは「一光三  
尊」と言つて、一つの光背(こうはい)の中央に主尊の阿弥陀如  
来、その左側に観音菩薩(左脇侍 ひだりきょうじ)、右側に勢至菩  
薩(右脇侍)が立つこと。二つ目は、主尊と脇侍の手印が独特  
で、主尊は下に向けた左手の人差し指と中指を伸ばし、他の指は  
曲げる。左右の脇侍は、胸の前で、上に向けて広げた左手の平  
に、下に向けて右手の平を重ねる。三つ目は、左右の脇侍のかぶ  
り物が冠(かんむり)になつていふことなどです。

すらりとしてバランスの良い優しいお姿だと拝観するたびに思  
います。  
この阿弥陀三尊が世に出たいきさつは、八幡義生著「宝生寺善  
光寺式阿弥陀三尊御像」(文獻⑧)に記されています。昭和十五年(二



知した二階堂氏に関係があるのではないかと述べています。

私たちはご住職の特別の計らいで、境内にある収蔵庫を開扉し  
て頂き、間近に拝んだのでした。入り口の扉の横で加藤会員が阿  
弥陀三尊の軸を披露しました。阿弥陀様は天竺国を出て幾つかの  
国を過ぎ、日本に運ばれた最初の仏像でしたが、廃仏派によつて  
難波の堀江(なにわのほりえ)に捨てられ、その後、はるばる長野ま  
でもたらされ、善光寺に祭られたことを描いた掛け軸でした。

九四〇)十二月二  
十二日、八幡氏  
は地元の鶴田  
栄太郎、山口金  
次両氏と宝生  
寺を訪れ、六十  
年毎にしか開  
帳しないと  
言われる厨子の  
扉を開けて、こ  
の素晴らしい  
仏像を目にし  
たとあります。  
宝生寺に伝来  
したいわれは  
分からないが、  
懐島氏に変わ  
つて鎌倉時代  
の懐島郷を領





はるばる信州までもたらされた  
阿弥陀如来の縁起の掛け軸を  
説明する加藤会員

「右大…」の文字だけが残る道標が並んでいます。その位置から北に歩くとすぐに大山道の間門(まかど)に出ます。ずっと昔は大山道の道ばたにあったのだそうです。



日吉神社の狛犬

⑦日吉神社と大山道標その他の石仏

西久保の鎮守、日吉神社の境内で向かい合っている狛犬は昭和十六年に作られました。胸の筋肉は盛り上がり、腰が締まり、たてがみの先は尖って、いかにも向かうところ敵なしの姿をしています。この勇ましい姿の理由は太平洋戦争中に作られたからでしょう。

かつて境内には文字塔の道祖神(寛政六年 一七九四)、三猿の庚申塔(延宝八年 一六八〇)と並んで



けです。他地の道標のように、上にお不動様が座っていたのかも知れませんが、ひどく破損していますが、大山信仰の貴重な遺品です。

これらを見て、最後の見学地の「かっぱ徳利ひろば」を目指しました。

⑧かっぱ徳利ひろば

西に向かう大山道は小出川を越す大曲橋(以前は間門橋)の手前で県道四五号(丸子中山茅ヶ崎線)と一体となります。この地は、五郎兵衛さんが河童を助けて徳利を貰った所として知られています。地元ではここを伝説発祥の地としてPRに努めてきました。そして二〇二三年三月に「かっぱ徳利ひろば」が完成しました。今回のめぐりに、長年、この地の保全に携わってこられた西久保の鈴木國臣さんが運動の経過や伝説について話して下さいました。

河童の伝説は、いくらでも酒を出す徳利を河童から貰った五郎兵衛が、ある日、一念発起して酒を断つという自立成長譚になった。



たもののようにも思えます。  
 また興味深いことに、この伝説はすでに江戸時代に記録されているのです。天保二年(一八三二)に刊行された山田桂翁著『宝曆現来集』に、「河童より送る陶(やきもの)の事」という表題で載っています。(文献⑩)。話は次のとおりです。

天保二年卯年四月、本所に住す彫物師猪之助と申す男、大山

ています。これは鶴嶺小学校の校長だった佐藤萬吉という人が、話の筋を改変したからで、元の姿は日本各地にある「河童報恩譚」の一つでした。佐藤校長が新しくした話は、『相武研究 相模茅ヶ崎史観』の五二頁に、「郷土紙芝居 『伝説河童徳利』(文献⑨)のタイトルル、「茅ヶ崎第二国民学校」の筆者名で載っています。しかし残念なのは、佐藤校長が書き直した時期が書かれていないことです。小学校が国民学校になるのは昭和十六年で、掲載誌の刊行も同じ年ですが、すでに完成していた紙芝居の読み文だけを載せ



一疋は鎌倉に住す。一疋は間門川に住して、折々文通をせしとの事、彼の河童いわく、この陶の酒、飲みたる時、少しずつ残し置けば、万年も絶ゆることなしと言えり。ある時その意を知らざる者、残らず酒をあかし、それより一滴も出でず。おしき事なり。

今に五郎左衛門方の什器とせり。参りて尋ねれば見せける。

へ参詣のみぎり、同所間門村百姓 三輪堀五郎左衛門方へ立寄り、左の陶(やきもの)の訳聞き候よし写し来る。  
 この訳聞きしに、相州大山道 西久保と申す所、小さき川あり。その川にて河童、馬を引き込む所を、大勢にてこの河童を打殺さんとせしを、同所、間門村百姓 三輪堀五郎左衛門と申す男、河童を貰い助ける。その夜、河童礼に来る。右の陶へ酒を入れ、鱸(すずき)二本そえて来る。鎌倉時代のころなりと。およそ六百年を過し事なり。  
 この河童雄雌にて、一



かの彫物師猪之助、銀座御役所秋田氏にて出会いし時、余は故実を聞くを好み、見たるまま語り聞かせける故、直ぐさま写しおくなり。

この文で山田桂翁は、銀座の役所で彫物師の猪之助から聞いた話と、同時に見せて貰った徳利と魚のスズキの絵を写したと説明しています。話の要点は、大山参詣の途中の猪之助が、間門で三輪堀五郎左衛門(筆者注「三輪(ワ)堀」は「三ツ堀」の写し違いと思われる)に立ち寄って聞いた話になっている所です。おそらく、五郎左衛門は大山導者を相手に河童の話聞かせ徳利を見せて商売をしていたのでしょう。先に引用した『相武研究 相模茅ヶ崎史観』(文献⑩)に、「郷土資料写真社」の執筆者名で「大山の山開き中は、間門橋に一文二文の木戸銭を取って河童徳利を見せる見世物小屋が出来たものだ」と、子供の折に祖父から聞いて居たとあります。前出の文献⑩『続日本随筆大成』には、猪之助が写しておいた徳利と魚のスズキの絵がありますのでここに転載しておきます。また、筆者は頼まれて『藤法ニュース』という機関誌の一七八号(平成五年九月一日刊)に「カッパドックリの話」という小文を載せたことがあります。これには河童徳利の写真を添えましたので、その写真も転載します。今、茅ヶ崎に無い河童徳利は写真でもなかなか見られないのです。写真なら「自分は持っているよ」という方はぜひともお知らせください。この日の史跡めぐりをお召し受ければ徳利広場で無事に終了し、私たちは解散しました。

### 【引用文献】

文献① 『茅ヶ崎市史』1に収録 資料編上 九四頁 昭和五十年

二年刊

文献② 『新訂寛政重修諸家譜』第一四 五三頁〜

文献③ 山口金次「茅ヶ崎市内に現存する大名・旗本墓碑一覽」

『茅ヶ崎市史研究』創刊号所収 七三頁 昭和五十一年茅ヶ

崎市刊

文献④ 神崎彰利「茅ヶ崎地域における近世の領主たち」二

『茅ヶ崎市史研究』10 八六頁 昭和六十一年茅ヶ崎市刊

文献⑤ 鶴田栄太郎『大山街道舌栗毛』上巻 七〇〜七二頁 昭和

三十四年自刊

文献⑥ 『郷土らがさき』一四〇号 平成二十九年九月一日刊

文献⑦ 神崎彰利「茅ヶ崎地域における近世の領主たち」二

『茅ヶ崎市史研究』10 八五頁

文献⑧ 八幡義生著「宝生寺善光寺式阿弥陀三尊御像」『相武

研究 相模茅ヶ崎史観』二三頁 神奈川県郷土研究連盟 昭和

十六年八月刊 | 『郷土茅ヶ崎』上巻 一〇五頁 昭和四十

八年市教育委員会刊に転載

文献⑨ 『相武研究 相模茅ヶ崎史観』五二頁 | 『郷土茅ヶ

崎研究資料』第三集 三九頁 昭和三十三年十月刊と、『郷土

茅ヶ崎』下巻 三九頁に転載

文献⑩ 山田桂翁著『宝暦現來集』吉川弘文館刊『続 日本随

筆大成』別巻「近世風俗見聞集」七 三五六頁 | 『茅ヶ崎

市史』三卷五八七頁に転載。

文献⑪ 「河童徳利後日譚」『相武研究 相模茅ヶ崎史観』五

五頁

(令和五年八月十五日 記)



## 史跡・文化財めぐり

## 「茅ヶ崎市内の大山道を歩く」③に参加して

茅ヶ崎市香川在住 染谷倫人

今回は事前の勉強会から参加して史跡・文化財めぐりを行いました。印象的な事柄を稚拙な俳句を目次代わりにして、感想を述べさせていただきます。

円蔵 神明大神にて

## 夏木玄保元の乱の一騎打ち

最初の訪問地、神明大神。平野会長が挨拶も早々に、茅ヶ崎郷土会の会員であり、「ちがさき丸」ことふるさと発見博物館の会の加藤会長と馬上で弓矢を構える格好をしました。これは、神明大神が大庭景能の旧宅ということで、吾妻鏡にある弓の名手鎮西太郎為朝と大庭景能の保元の乱での一騎打ちの再現でした。実は、事前勉強会でも開始早々二人で再現を試みたようですが、見る方にも準備がなく、またお二人も勝手が悪かったようで何をしているのか私には理解できませんでした。

本番ではとても分かりやすい身のこなしで十二分に理解ができました。おそらく、勉強会のあとにお二人で試技を繰り返された



円蔵の鎮守 神明大神

のかと想像し、とても微笑ましく感じました。

残念ながら、神明大神は事前勉強会の「神明大神宮の石造物配置図」で三三基の石造物があり、広大な神社かと思っていた分、意外にも狭く、少しがっかりしました。しかし、多くの石造物があるということ、地元の方々が昔から大切にしている社ということがよくわかりました。

円蔵 輪光寺にて

## 三猿の深く刻まる梅雨晴れ間

「見ざる聞かざる言わざるの三猿」という日光東照宮のものしか浮かばず、今回の史跡巡りで身近にあることがわかりました。

そして庚申塔や道祖神に彫られるものが、江戸時代の前半は仏像や神象や三猿などであったが、後半は「庚申塔」とか「道祖神」の文字になったという説明を聞き、長い間立っている三猿の庚申塔に歴史を感じました。

また、今回の史跡・文化財巡りで印象的だったのは、墓石や石塔に使われている石でした。古い石造物は、花崗岩で彫られていて石の風化が少なく、それより新しい石造物は凝灰岩で彫られていて風化が激しいということでした。それは、古い物は硬い石で造作が大変だったが、新しい物は軟らかい石で造作が容易だったので軟らかい石を使うようになったことが後世になって違いとして現れたわけです。

そのような目で見ると輪光寺の庚申塔は、三猿がはつきりと彫られており、「寛永拾七年」(一六四〇)の文字があり、往時の職人が硬い石に一生懸命彫ったと思いました。そこで、俳句をしたためたわけですが、実は輪光寺の後に、北向き地藏や日吉神社でも三猿の庚申塔に出会い、私の頭に三猿がさらに深く刻まれました。これも、この句には含まれています。

西久保 宝生寺にて

### 光背を一(いつ)に三尊麻作務衣

宝生寺の近くを通るたびに重要文化財があることは知っていました。それだけに、今回訪問できることを楽しみにしていました。そして、作務衣姿の住職が鍵を開けて案内してくれました。一年に一度だけ開帳する国の重要文化財の阿弥陀三尊像に息のかかる

距離でお会いすることができました。

私が見学した後に、平野会長がお堂の前で、一光三尊式(一つの光背に三尊仏が並ぶ)で善光寺の本尊の形式と説明があり、事前勉強会の写真を思い出しました。そこで再度お堂の奥の三尊像をお堂の外から見上げました。事前勉強会の復習をして参加すべきだったと反省しました。

今回の史跡文化財めぐりを企画運営してくださったスタッフに感謝するとともに、事前勉強会に参加・復習することの大切さを痛感しました。これからも続けて参加する所存です。

(二〇二三年七月十七日)

### 茅ヶ崎郷土会 令和五年度 これからの事業予定

#### ○史跡・文化財めぐり

- ・第306回 10月14日(土) 綾瀬市の早川城址などを歩く
- ・第307回 12月9日(土) 大和市の深見城址などを歩く
- ・第308回 令和6年3月9日(土) 市内の東海道を歩く(その一) 小和田・菱沼地区

- 郷土の歴史民俗勉強会(原則第三火の午後、図書館第一会議室)
- ・9月12日(火)「綾瀬市早川城址他の歴史と史跡・文化財」

- ・11月21日(火)「大和市深見城址他の歴史と史跡・文化財」
- ・令和6年2月20日(火)「小和田・菱沼の歴史と史跡・文化財」

予定した日に図書館が使えない場合は日取りを変えることがあります。また、ここに記した以外にも実施することがあります。

### ○第63回市民文化祭(茅ヶ崎みんなのアートフェス2023)

#### 写真展

- ・「史跡めぐり(下寺尾の遺跡と歴史 伊勢原市丸山城址)」
- ・「相模川河口付近と北部丘陵の野鳥たち」
- ・「柳島海岸などの風景」
- ・「令和4年度郷土芸能大会」

#### 期日

- ・10月27日(金) 13時～16時
- ・同月28日(土) 9時30分～16時
- ・29日(日) 9時30分～15時

#### 会場

茅ヶ崎市民文化会館展示室A

### ○第51回郷土芸能大会

- ・11月26日(日) 13時開演 茅ヶ崎市民文化会館小ホール

### ○郷土会報「郷土らがさき」の発行

- ・159号 令和6年1月1日発行予定

### 【157号 正誤表】

36頁 上段 【これからの事業予定】 1行目

5月31日(火) ↓ 31日(水)

### 【印刷物交換 受贈図書】

藤沢地名の会々報一一一号(2023年2月1日発行)  
藤沢地名の会々報一二二号(2023年6月1日発行)

ありがとうございます。茅ヶ崎郷土会からも会報を送らせて頂いております。

### 【編集後記】

今回、多くの原稿を頂きました。まずお礼を申し上げます。お陰様で一五八号はいつも通りに発行することが出来ました。肝っ玉の小さい編集担当者は、発行月が近づくと、食欲不振、不眠、血圧上昇、体重減少、頭痛、視力低下、その上に精神は安定せず意味不明のことを口走るのだそうです。これらの原因はただ一つ、原稿が来なかったらどうしよう！

歴史関係はもちろん、嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、旨かったもの、ためになった本や面白かった本のこと、PRしたいこと、ふるさとの思い出、短歌・俳句に詩歌・創作などをお寄せ頂き、編集担当を救ってください。

話は変わります。更新が滞ることも多々ですが、茅ヶ崎郷土会のホームページは続いています。内容がいろいろあるためか見てくださる人は絶えません。はるばる外国から訪れる人もあります。

「茅ヶ崎郷土会」で検索してみてください。二次元コードは次のとおりです。

では、また次号でお会いいたしましょう。  
お元気で。(編集担当)

